

未定稿

大学入学希望者学力評価テスト実施方針 策定に当たっての考え方（案）

- 大学入試センター試験に代わる新たなテストの制度設計については、高大接続システム改革会議の「最終報告」を踏まえ、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」検討・準備グループにおいて、鋭意検討を進めてきたところ。
- このたび、検討・準備グループにおける議論等を踏まえ、大学入学希望者学力評価テストの実施方針（案）をとりまとめたところであり、各項目の考え方等については以下のとおり。

※ 今後、更に大学・高等学校等の関係団体等の意見を聞き、平成29年度初頭に実施方針として確定する。

1. 名称

大学入試センター試験に代わるテストの名称は、大学入学希望者学力評価テスト（以下「新テスト」という。）とする。

- 大学入試センター試験に代わる新たなテストの名称については、高大接続システム改革会議「最終報告」（平成28年3月。以下「最終報告」という。）以降、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」として仮称を用いてきたところである。

2. 目的

新テストは、大学入学希望者を対象に、高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定するとともに、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とする。このため、各教科・科目の特性に応じ、高等学校段階で習得すべき知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価を行うものとする。

3. 実施主体

新テストは利用大学が共同して実施する性格のものであることを前提に、大学入試センター（以下「センター」という。）が問題の作成、採点その他一括して処理することが適当な業務等を行う。

4. 実施開始年度

平成32年度（平成33年度入学者選抜）

※ 次期学習指導要領に基づくテストとして実施することとなる平成36年度以降の方針については、平成33年度を目途に策定・公表予定。

< 2. 目的 >

- 新テストの目的について、高等学校教育や大学教育との関係を踏まえ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の評価の観点から明確にするものである。

< 3. 実施主体 >

- 実施主体に関し、現行の大学入試センター試験は、法律上、「大学が共同して実施する」ものであり、大学入試センターは、この試験に関し「一括して処理することが適当な業務」等を行うものとされている（大学入試センター法第13条第1項）。新テストにおいても、最終報告を踏まえ、その位置づけを引き継ぐこととする。
- このことを踏まえ、新テストは、実態上、利用大学が共同して実施するテストであることを十分認識し、テストについては、専門家（例：教科関係、測定論・評価論など）による理論・実践の両面の知見をもとに全体設計（テストデザイン）を行う。
また、テストの実施に際しては、テスト問題作成を担当する大学教員の派遣や実際のテスト実施業務を担当することなど、センターとの緊密な連絡体制のもと、利用大学がそれぞれ責任をもって取り組むものとする。
- ※ 各大学においては、現状でも、試験問題作成に携わる大学教員の派遣、試験場の設定、試験監督者等の選出及び実施方法等の周知、受領試験問題等の保管・管理、試験の実施、答案の整理・返送等の業務について責任を持って行っているところであり、新テストにおいても、これらの業務を担うこととなる。

- また、新テストについては、十分な知識・技能を前提として、思考力・判断力・表現力を重視して、評価する作問体制への転換等が必要であることを踏まえ、これまでのセンターの作問方針・作問体制を抜本的に見直すなど、機能を強化する。

< 4. 実施開始年度 >

- 中央教育審議会答申（平成26年12月）、高大接続改革実行プラン（平成27年1月）、最終報告により定められたスケジュールに従い、実施開始年度を平成32年度とする。
- 本実施方針については、現行学習指導要領下におけるテストについて想定しており、次期学習指導要領に基づくテストが実施される平成36年度以降の実施方針については、平成33年度を目途に策定・公表する。

5. 出題教科・科目等

○ 新テストの出題教科・科目等は、別表1のとおりとする。

※ 次期学習指導要領において高等学校の教科・科目が抜本的に見直される予定であることを踏まえ、平成36年度以降は教科・科目の簡素化を含めた見直しを図る。

○ 「国語」、「数学Ⅰ」、「数学Ⅰ・数学A」については、マークシート式問題に加え、記述式問題を出題する。

※ 次期学習指導要領に基づくテストとして実施することとなる平成36年度以降は、地理歴史・公民分野や理科分野でも記述式問題を導入する方向で検討を進める。

○ 平成32年度に実施される新テストの出題教科・科目等については、現行学習指導要領の下、別表1のとおりとする。

○ 最終報告では、「試験の出題科目数については、思考力・判断力・表現力を構成する諸能力を中心に評価する作問体制への転換が必要であることや、受検者数の状況等も勘案しつつ、できるだけ簡素化する。」ことが示されており、平成36年度以降は、次期学習指導要領で高等学校の教科・科目の構成が抜本的に見直されることを踏まえ、新テストの教科・科目の簡素化を含めた抜本的な見直しを図る【別紙1】。

○ 記述式の対象教科・科目については、高等学校学習指導要領で「国語総合」「数学Ⅰ」が共通必修履修科目として設定されていることを踏まえ、当面、新テストの『国語』、『数学Ⅰ』、『数学Ⅰ・数学A』において出題する。

○ 一方、国語・数学に限らず、地歴公民や理科にも記述式を導入し、全教科を通じてより主体的、論理的な思考力・判断力・表現力を高めることは重要である。国語・数学では、上述のとおり、「国語総合」「数学Ⅰ」が共通必修履修科目であることを踏まえ、記述式の対象科目を決定したが、地歴公民や理科は現行学習指導要領では共通必修履修科目が設定されていない（現行では、18の試験科目を実施）。

このため、国語・数学における記述式導入の状況を見極めながら、歴史総合、地理総合、公共が共通必修履修科目となるなどの次期学習指導要領に基づくテストとして実施することとなる平成36年度のテストから地理歴史・公民分野や理科分野でも記述式問題を導入する方向で検討を進める。

6. 記述式の実施方法等

(1) 国語

①出題の範囲

記述式の出題範囲は、「国語総合」（古文・漢文を除く。）の内容とする。

②評価すべき能力・問題類型等

多様な文章や図表などをもとに、複数の情報を統合し、構造化して新しい考えをまとめるための思考力・判断力、その過程や結果について、相手が的確に理解できるよう論拠に基づき表現する力などを評価する。

設問において一定の条件を設定し、それを踏まえ結論や結論に至るプロセス等を解答させる条件付記述式とし、特に「論理（情報と情報の関係性）の吟味・構築」や「情報を編集して文章にまとめること」に関わる能力の評価を重視する。

③出題・採点方法

- 記述式問題の作問、出題、採点はセンターにおいて行う。
 - 多数の受検者の答案を短期間で正確に採点するため、その能力を有する民間事業者を有効に活用する。
 - センターが記述式問題の採点結果をマークシート式問題の成績とともに大学に提供し、各大学においてその結果を活用する。
- ※ センターが新テストにおいて作問、出題、採点する記述式問題とは別に、各大学が個別選抜において一定の期日に出題・採点に利用することができるようセンターが大学の求めに応じ記述式問題及び採点基準を提供する方式も導入する。

<記述式の導入意義>

- 高等学校教育の改革充実という観点からは、高等学校学習指導要領が狙いとするところを大学入学者選抜でよりの確に評価することが重要である。特に、現行の高等学校学習指導要領が、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育むため国語をはじめとする全教科において「言語活動」（例：説明、論述、討論等）を充実することを目標として定めていることを考慮する必要である。
- このような趣旨を実現するためには、各大学が個別試験で学習指導要領の内容を踏まえた記述式試験を全受験生に実施することが望ましいが、国立大学の個別試験でも、国語、小論文、総合問題のいずれかを課している募集人員は約4割になっている。
こうした現状も踏まえ、各大学の負担をより少なくし、幅広く利用できるようにする観点からは、約56万人が志願する大学入試センター試験をいかに改善するのが重要な鍵となる。

高大接続改革を国公私を通じて推進するため、国公立大学の参画の下、共通テストにおいて、言語活動の成果を的確に評価することが重要である。特に記述式を導入し、より多くの受験者に課すことで、高等学校に対し、能動的な学習をより幅広い形で促していく大きなメッセージになる。

- あわせて、最終報告では、各大学の個別選抜においても記述式の導入が求められている。各大学の個別選抜においては、共通テストの積極的な活用を図るとともに、高等学校学習指導要領を踏まえ、論理的な思考力・判断力・表現力等を適切に評価するため、例えば、国語を中心として、複数の素材を編集するなどとして、自らの考えを立論し、さらにそれを表現できるプロセスを評価できる記述式問題を課すなど、作問の改善等を図ることが重要である。
- 共通テストと個別選抜の双方において、それぞれの特質を踏まえながら、記述式の充実を図り、言語活動を通じて身に付いた資質・能力を的確に評価することにより、高等学校教育・大学教育の改革充実により大きな好影響を与えることが期待できる。

<検討経緯>

- 記述式については、教科専門家やテスト理論家等の協力を得て、作問方法と採点方法に関する各検討チームを設け、作問の構造化や採点方法の在り方等について具体化を進めた【別紙2】。
- 記述式の実施時期を含む全体の制度設計
 - ・ 昨年8月には、記述式の導入意義、評価すべき能力や作問の構造、採点の方法・体制等を全体として考慮した上で、実施時期を含む全体の制度設計について、1月に実施しセンターが採点する案、12月に実施しセンターが採点する案、1月に実施しセンターがデータを処理し、それを踏まえて各大学が採点する案の三つの案を提示した【別紙3】。
 - ・ このうち、各大学が採点を行う案については、限られた期間の中で実施でき、作問内容の柔軟な設定が可能となるなどの点で優れた選択肢である一方、大学の負担・体制や私立大学の入試日程、個別選抜との関係等も考慮しつつ、多くの大学が共通テストの記述式を活用できる選択肢も用意するため、①センターが解答の形式面を確認し、各大学が採点する（パターン1）、②センターが段階別表示まで採点を行い、各大学で確認する（パターン2）の2つに整理し、平成28年11月に関係団体に提示した。【別紙4】

- これを受け、「大学入学者選抜試験における記述式問題出題に関する国立大学協会としての考え方」（12月8日）では、すべての国立大学受験生に、個別試験で論理的思考力・判断力・表現力等を評価する高度な記述式試験を課すことを目指すこと、パターン2を、具体的な問題例と採点基準等を今後十分に吟味した上で5教科7科目の中の国語において、国立大学の一般入試の全受験生に課す方向で検討すること、パターン1を、各大学の個別試験問題として活用することができるよう各大学の求めに応じて、大学入試センターが提供する方向で検討すること、などの考えが示された。

【別紙5】

- パターン2については、2回にわたるセンターのモニター調査（フィージビリティ検証）を通して、大規模共通かつ一斉の選抜試験を想定した記述式問題のモデル問題の作成及び公表に向け、条件設定や採点基準、試験時間等の検証を行った。

モデル問題案は、以下の要件を満たす必要がある。

- ア. 後述②で示している評価すべき能力測定が可能な問題であること
- イ. 1月中旬に試験を実施し、2月上旬に成績提供するという短期間での採点が可能な問題であること
- ウ. 選抜試験であることから、客観性・公平性を確保した採点が可能な問題であること
- エ. 一定の時間内で解答が可能な問題であること

モニター調査を通じて、受検者の解答パターンがある程度限定されており短期間の客観性・公平性を確保した採点（*）が見込めること、国語全体の試験時間は100分程度で収まることなど、上記ア～エの要件等について等について一定の見極めをつけることができた。今後、5万人規模の大規模なプレテストを実施する予定であり、上記の検証項目や採点期間等について更に検証していく。

なお、上記ア～エの要件を満たすように作成したモデル問題案は別添のとおりである。

*国語で評価すべき能力を踏まえ出題した記述式問題の答案について、今回の調査では、受検者1名の答案につき採点者2名が採点し、正答条件への適合性を判定。採点者2名の不一致率を分析した結果を踏まえると、記述式問題については、①文字数は長くても80～120字を想定すること、②採点基準を改善することで不一致を防ぐこと、③上位判定者に協議し不一致を解消することなどにより、採点の精度は担保できると考えられる。

→ 本年11月予定の大規模プレテスト（5万人）によって更に検証し、作問や採点基準の工夫を重ねる。

○ このような状況も踏まえつつ、国語の記述式については、次のとおり対応する。

①出題の範囲

- ・ 当面、高等学校で共通必修科目が設定され、記述式導入の意義が大きい「国語総合」（古文・漢文を除く。）で導入する。

②評価すべき能力・問題類型等 ※別紙6参照。

○ 最終報告において、学力の3要素を踏まえつつ、大学における学修や社会生活において必要となる問題発見・解決の能力等の諸能力を有しているかどうかを評価することが一層重要であるとして、新テストでは、特に、

- (1)内容に関する十分な知識と本質的な理解を基に問題を主体的に発見・定義し、
- (2)様々な情報を統合し構造化しながら問題解決に向けて主体的に思考・判断し、
- (3)そのプロセスや結果について主体的に表現したり実行したりするために必要な諸能力をいかに適切に評価するかを重視すべき。

という観点から作問を行うことが示された。

○ また、中教審において検討された国語を含む言語能力を構成する資質・能力が働く思考の過程では、「テキスト（情報）の理解」と「文章や発話による表現」を柱に、以下のように整理している。

- ・「テキスト（情報）の理解」（認識から思考への思考の過程で、構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成の一部などを経る）
- ・「文章や発話による表現」（思考から表現への思考の過程で、内容・テーマの検討、構成・表現形式の検討、考えの形成・深化、推敲、表現などを経る）

○ このことを踏まえ、過去の大学入学者選抜の問題や高校入試問題を分類すると、概ね以下のとおりである。

- (1)「テキストの部分の内容や解釈」（テキストの部分把握、精査・解釈して解答する問題）
- (2)「テキストの全体の内容や解釈」（テキストの全体把握、精査・解釈して解答する問題）
- (3)「テキストの精査・解釈に基づく考えの形成」（テキストを基に、考えを文章化する問題）
- (4)「テキストの精査・解釈を踏まえた自分の考えの形成」（テキストを踏まえて発展させた自分の考えを解答する問題（解答の自由度の高い記述式））

作問検討チームでは、これらの分析を踏まえ、大規模共通試験の実現可能性等を併せて検討を行い、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の記述式問題として、(1) (2)だけではなく、(3)について条件付記述式として出題することとした（なお、(4)については、解答の自由度が高いことから個別選抜に馴染みやすい問題であるため、個別選抜において出題することが望ましいとされた）。

- また、素材選定の工夫の例としては、次のようなものが考えられる。
 - ・ 論理的な内容を題材にした説明、論説等
 - ・ 新聞記事・社説、会議等の記録、実務的な文章（取扱説明書、報告書、提案書等）、公文書、契約書や法律の条文等
 - ・ 統計資料（図表・グラフ）を用いた説明等

③出題・採点方法 ※別紙7参照

- ・ センターにおいて、作問、出題、採点を行う問題については、例えば、文字数80～120字程度の問題を含め3問程度、マークシート式問題と記述式問題の大問は分けて出題することとし、試験時間はマークシート式と併せて100分程度を想定している。
- ・ 採点方法については、答案をOMR（光学式マーク読み取り装置）で読み取り、採点者が受検者個人を特定できる情報を見えなくする処理を施した上で採点する仕組みを想定している。採点については、既にこれまでの経験を蓄積している民間事業者を有効に活用する方向で調整する。
- ・ また、国大協が個別試験で「高度な記述式」を課すことを合意していることや、私立大学の利用が困難であることなどから、センターが作問し、共通テストの一部として実施するのではなく、大学の求めに応じて記述式問題及び採点基準等を提供し、一定の期日に各大学が個別選抜の一部として実施・採点する案を実現する方向で調整する（200～300字程度を想定）。

※ 平成32年度以降、作題や採点の知見の積み重ねにより、作題の工夫、採点精度、識別力の一層の向上を図る。

平成36年度以降は、平成32年度からの実施状況やC B T等の技術開発の状況等を踏まえつつ、更なる向上を図る。

(2) 数学

①出題の範囲

記述式の出題科目は、「数学Ⅰ」「数学Ⅰ・数学A」とし、出題範囲は「数学Ⅰ」の内容とする。

②評価すべき能力・問題類型等

図表やグラフなどを用いて考えたことを数式などで表したり、問題解決の方略などを正しく書き表したりする力などを評価する。

特に、「数学を活用した問題解決に向けて構想・見通しを立てること」に関わる能力の評価を重視する。

③出題・採点方法

- 記述式問題の作問、出題、採点はセンターにおいて行う。
- 多数の受検者の答案を短期間で正確に採点するため、その能力を有する民間事業者を有効に活用する。
- センターが記述式問題の採点結果をマークシート式問題の成績とともに大学に提供し、各大学においてその結果を活用する。

<記述式の導入意義>

- これまでの大学入試センター試験では、問題解決における構想から結論に至るプロセスがあらかじめ文脈として提示されており、受検者は、与えられたそのプロセスに沿って、必要な数値を求めていく「与えられた問題解決の過程を再現する力」を測る問題が中心となってきた。
また、各大学の個別選抜の問題では、いわゆる証明問題を含む問題解決のプロセス全体を問うものが多いが、個別選抜で数学が課されない入学希望者に対しては、能力の評価が「与えられた問題解決の過程を再現する力」にとどまる場合が多い。
- 数学は、科学の言葉といわれることがあるように、広い意味で言語のような役割を果たす教科であり、各教科で身に付けた知識・技能を活用して問題発見・解決をする際に重要な役割を果たす。また、「読み・書き・計算（算盤）」などと表現することがあるように、数学は国語と並んで、日常生活や大学におけるあらゆる学修の基礎となる内容を学ぶ教科であり、高等学校における共通必修科目である。
- 中央教育審議会答申（平成28年12月21日）において、高等学校では、事象を式で数学的に表現することに課題があると指摘している。このため、様々な事象と、数式、

図表やグラフ等の数学的な表現を関連付けること（事象を基に数学的な表現を行ったり、数学的な表現を事象に戻してその意味を考察したりすることを含む。）や、問題解決に当たって解決の方向を構想すること等を記述式で問うことは高等学校における指導の改善を促すことに繋がる。

<検討経緯>

○ 6（1）の解説を参照。数学の場合、平成28年11月の時点においても、「センターが段階別表示、各大学で確認」の案のみ示していたところである。

○ 2回にわたるセンターのモニター調査（フィージビリティ検証）を通して、大規模共通かつ一斉の選抜試験を想定した記述式問題のモデル問題の作成及び公表に向け、条件設定や採点基準、試験時間等の検証を行った。

モデル問題案は、以下の要件を満たす必要がある。

ア. 後述②で示している評価すべき能力測定が可能な問題であること

イ. 1月中旬に試験を実施し、2月上旬に成績提供するという短期間での採点が可能な問題であること

ウ. 選抜試験であることから、客観性・公平性を確保した採点が可能な問題であること

エ. 一定の時間内で解答が可能な問題であること

モニター調査を通じて、受検者の解答パターンがある程度限定されており短期間で客観性・公平性を確保した採点が見込めること、数学全体の試験時間は70分程度で収まることなど、上記ア～エの要件等について一定の見極めをつけることができた。今後、5万人規模の大規模なプレテストを実施する予定であり、上記の検証項目や採点期間等について更に検証していく。

なお、上記ア～エの要件を満たすように作成したモデル問題案は別添のとおりである。

*数学で評価すべき能力を踏まえ出題した記述式問題の答案について、今回の調査では、受検者1名の答案につき採点者2名が採点し、正答条件への適合性を判定。採点者2名の不一致率を分析した結果を踏まえると、記述式問題については、①解答内容が限定されるよう作問上の工夫を行うこと、②採点基準を改善することで不一致を防ぐこと、③上位判定者に協議し不一致を解消することなどにより、採点の精度は担保できると考えられる。

→ 本年11月予定の大規模プレテスト（5万人）によって更に検証し、作問や採点基準の工夫を重ねる。

○ このような状況も踏まえつつ、数学の記述式については、次のとおり対応する。

①出題の範囲

- ・ 出題科目「数学Ⅰ」及び「数学Ⅰ・A」の両方において、当面、高等学校で共通必修科目として設定され、記述式の意義が大きい「数学Ⅰ」の学習内容に関する問題で出題する。

②評価すべき能力・問題類型等 ※別紙8参照。

中教審において検討された数学の問題発見・解決のための思考の過程は、概ね以下のようにになっている。

- ・ 「問題を数学的に捉える」（日常生活や社会の事象、数学の事象について数学的に捉える）
 - ・ 「問題を焦点化する」（数学を活用した問題解決に向けて構想・見通しを立てる）
 - ・ 「焦点化された問題を解く」（焦点化した問題を解決する）
 - ・ 「結論の活用」（解決した結果について、解決過程を振り返り、得られた結果を意味づけたり、活用したりすることや、概念を形成したり、体系化したりする）
- ・ 過去の大学入学者選抜の問題を分類すると、概ね以下のとおりである。
- (1) 「焦点化された問題を解くこと」（数学的に処理すること等によって、数値等の解答を得る）
 - (2) 「問題を焦点化すること」（数学的な処理を行って解決して結果を得るために数式、図表、グラフなどで表現する）
 - (3) 「問題解決するに当たって把握すべき数学的な事柄・事実や、問題解決に向けた構想を立てることなどの問題解決の方略を表現すること」
 - (4) 「問題解決のプロセス全体を表現すること」（いわゆる証明問題など）

作問検討チームでは、これらの分析を踏まえ、大規模共通試験の実現可能性等を併せて検討を行い、新テストの記述式問題として、上記の(1)(2)に加え、(3)について条件付記述式として出題することとした（数学の問題は、複数の解法が存在する場合があるため、当面は(4)を出題せず、引き続き個別選抜で問うことが望ましいとされた。）。

○ また、素材選定の工夫の例としては、次のようなものが考えられる。

- ・ 数学的な事象を扱ったもの

- ・日常生活、社会事象を扱ったもの
- ・図表やグラフなどを用いて考えたことが解答の前提となる問題

③出題・採点方法

- ・ 問題数は3問程度、大問の中にマークシート式問題と記述式問題を混在して出題することとし、試験時間はマークシート式と併せて70分程度を想定している。
- ・ 採点方法については、答案をOMR（光学式マーク読み取り装置）で読み取り、採点者が受検者個人を特定できる情報を見えなくする処理を施した上で採点する仕組みを想定している。採点については、既にこれまでの経験を蓄積している民間事業者を有効に活用する方向で調整する。

※ 平成32年度以降、作題や採点の知見の積み重ねにより、作題の工夫、採点精度、識別力の一層の向上を図る。

平成36年度以降は、平成32年度からの実施状況やC B T等の技術開発の状況等を踏まえつつ、更なる向上を図る。

7. 英語の4技能評価

- 高等学校学習指導要領における英語教育の抜本改革を踏まえ、大学入学者選抜においても、「聞く」「読む」「書く」「話す」の4技能を適切に評価するため、新テストの枠組みにおいて、現に民間事業者等により広く実施され、一定の評価が定着している資格・検定試験を活用する。
- 具体的には、以下の方法により実施する。
 - ① 資格・検定試験のうち、試験内容・実施体制等が入学者選抜に活用する上で必要な水準及び要件を満たしているものをセンターが認定する（以下、認定を受けた資格・検定試験を「認定試験」という。）。このような方式をとることにより、学習指導要領との整合性、CEFR（※1）に対応した段階別成績表示（※2）、実施面でのセキュリティや信頼性等を担保するとともに、認定試験実施団体に対し、新テスト受検者の認定試験受検料の負担軽減方を講ずることなどを促す。
 - ※1 CEFR…(Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment)の略称。外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠。
 - ※2 A1～C2の6段階。
 - ② 新テスト受検者の認定試験の結果はセンターで一元的に集約し、CEFRに対応した段階別成績表示により、他の教科・科目の成績とともに大学に提供する。
- 認定試験の受検期間・回数については、受検者の負担、高等学校教育への影響等を考慮し、高校3年の4月～12月の間の2回までとする。
- センターが従来実施してきた英語科目（リーディング、リスニング）については、制度の大幅な変更による受検者・高校・大学への影響を配慮し、当面、平成32～35年度の間は継続して実施することとし、希望する大学が利用できることとする。

なお、平成36年度以降については、認定試験の活用状況等を検証しつつ、基本的には実施しない方向で検討する。

- 英語の有識者等の協力を得て英語4技能実施企画部会を設置し、専門的な検討を進めるとともに、検討・準備グループにおいても重点的に審議を行うなど、英語の資格・検定試験の活用の具体化に向けた検討を進めた（平成28年度：部会は4回開催）。
- 公平性・公正性の観点を含め、民間の資格・検定試験の活用の実現可能性について、主な資格・検定試験団体から詳細な聞き取りなどを実施し、具体化に向けた検討を進めた。

〔英語 4 技能評価の考え方〕

＜英語教育の抜本的改革＞

- グローバル化が急速に進展する中、英語によるコミュニケーション能力の向上が課題となっており、現行の高等学校学習指導要領（平成 25 年度～）では、授業は英語を用いて行うことを基本とし、英語 4 技能を総合的に育成することが求められている。

また、次期学習指導要領では、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、外国語の能力を総合的に評価する C E F R 等を参考に、段階的な「国の指標形式の目標」を設定するとともに、統合的な言語活動を一層重視している。

- 大学入学者選抜においては、このような高等学校段階の「聞く」「読む」「書く」「話す」の 4 技能の総合的な能力を適切に評価できるようにすることが必要であり、このことは、グローバル人材育成の取組など、大学教育改革にも寄与することにもなる。

＜資格・検定試験の活用の必要性＞

- 本来的には、各大学が個別選抜において「聞く」「読む」「書く」「話す」の 4 技能評価を全受検生に実施することが望ましいが、ノウハウや作問・採点者、採点期間・コストなど、体制・負担の観点から課題が大きい。

- 大学入試センター試験では、従来、コミュニケーション能力を重視した出題範囲の設定（平成 9 年度～）や、リスニングの導入（平成 18 年度～）等に取り組んできたが、大卒では「読む」「聞く」の能力を中心に選択式で問うものとなっており、試験開始以来、大きな変化はない。

また、「話す」「書く」について、50 万人規模での一斉実施のための環境整備等の観点から、現行のセンター試験のように、大規模、同日一斉試験は困難である。

このため、「聞く」「読む」「書く」「話す」の統合型の言語活動など、英語教育の抜本的改革に対応するには限界がある。

- 一方、民間の資格・検定試験は、英語 4 技能を総合的に評価するものとして社会的に認知され、一定の評価が定着している。高等学校教育や大学の初年次教育の場でも活用が進み、推薦・AO 入試を中心に大学入学者選抜にも活用されている。
- 本件に関連して、「英語力評価及び入学者選抜における資格・検定試験の活用促進について（通知）」（平成 27 年 3 月 31 日文部科学省初等中等教育局長・高等教育局長

通知)においても、高等学校や大学等における資格・検定試験の活用を奨励しているところである。

- さらに、最終報告でも、「民間の資格・検定試験の知見の積極的な活用の在り方なども含め検討する」とされている。
- これらを踏まえ、こうした状況の中、大学入学者選抜において、資格・検定試験を積極的に活用することにより、「話すこと」「書くこと」を含む英語4技能評価を推進することが有効である。このことにより、高等学校における授業改善を促進する。

〔英語4技能評価の活用〕【別紙9】

＜大学における活用の在り方＞

- 各大学の個別選抜においては、認定試験の段階別表示の結果について、例えば、
 - ・ 出願資格
 - ・ 試験免除
 - ・ 得点加算
 - ・ 総合判定の一要素などの方法で活用することが考えられ、従来センター試験を活用してきた大学に対しては、活用事例を複数例示するなど活用を促していく。
- 認定試験を活用する場合は全ての試験を対象とするよう関係団体に依頼する。
- なお、センターが従来実施してきた英語科目については、平成36年度以降は、認定試験の活用状況等を検証しつつ、認定試験では対応できない受検生（例えば、障害のある受検生など）への対応を除き、基本的には、実施しない方向で検討する。

＜活用を推進するための方策＞

- 現在、大学に対して行っている成績提供業務の一環として、以下のとおり認定試験の結果をセンターに一元的に集約し、大学に提供する。
 - ・ 受検生は、認定試験出願時に、センターへ自らの成績を送付することを認定試験団体に依頼。これを受け、認定試験団体は、認定試験の判定後、受検生に「成績請求票」を送付するとともに、依頼を受けた受検生の成績をセンターに送付。
 - ・ 受検生は、大学出願時に「成績請求票」を大学に送付。大学は、「成績請求票」を基にセンターに成績を請求。

- ・ センターは、大学からの成績請求票に基づき、認定試験団体から送付された受検生の成績を大学に提供。

○ これにより、

- ① 一括した成績提供による大学、受検生、認定試験団体の各手続きの簡素化とセキュリティリスクの軽減
- ② 成績受領フォーマットの統一による大学における成績集計の事務コストの削減
- ③ センターがデータを蓄積することによる改善、様々な検証が可能となる。

<学習指導要領との整合性>

- ・ 「認定」を通じて、資格・検定試験と現行学習指導要領の対応関係を確認する。
- ・ 併せて、教育振興基本計画や次期学習指導要領における英語力の目標等を踏まえ、各資格・検定試験で測定可能な英語力の水準について確認する（CEFRのA2及びB1の能力測定）。

<評価面>

○ 採点の質

- ・ 各認定試験団体に、採点の質の確保に関する客観的な検証を行い、そのプロセスに関する情報を記録・公開していることを求める。
あわせて、信頼性向上に対する改善努力を定期的に公表することを求める。

○ 異なる資格・検定試験の結果の比較

- ・ 各認定試験団体に、試験問題、評価の観点、採点基準等がCEFRと対照していることを示す客観的な検証方法・結果を公表することを求める。
※CEFRと各資格・検定試験との対照表の向上のための検証を実施。

<実施方法面>

○ 時期・回数制限

- ・ 実施時期・回数（試験団体）：毎年4月～12月の間、複数回実施可能であることを求める。
- ・ 受検時期・回数（受検生）：受検時期は、高校3年生以降の毎年4月～12月とし、受検可能回数は2回とする（良い方の結果を用いる方式とする）。

※ 受検生の負担、高等学校教育への影響（例：早期から認定試験対策に追われるとの懸念）の一方、受検機会の複数化の観点も考慮し、一定の回数制限を設けることが適当。

※ 有効期限の取扱いや既卒者の対応も検討。

○ 実施場所・体制の確保

・ 認定試験のいずれかにおいて、センター試験と同等以上の実施場所を確保できるよう、試験団体と調整。

※ 現在でも、複数の試験団体が対応可能

・ 採点者、試験監督者等必要となる人員の質・量を確保することを求める。

（例えば、会場ごとに、認定試験団体が一定の資格を有する試験監督者等を派遣。なお、高校教員にも協力を求める場合は、研修の実施や誓約書の提出等を求めるなど。）

・ 各認定試験団体に、障害のある受検生の配慮として、認定試験の実施に当たっては、合理的配慮の方法として適切な手段を提供することを求める。

・ 資格・検定試験については、主に各試験団体において検定試験に対する自己評価がされている。また、現在、第三者評価機関による第三者評価の在り方について検討されている。これらの効果的な活用の在り方も検討。

○ 検定料

・ 低所得者世帯の受検生等の検定料の割引や複数回受検時の減免等の配慮を求める（例：現行の割引等の額以下など）。

※ 現在、複数の試験団体が 5,000 円程度で実施

※ 平成 29 年度初頭の実施方針の公表後、更に高等学校・大学関係団体や資格・検定団体等との調整を進め、英語の詳細な制度設計や認定基準を公表する。

これを踏まえ、センターが各資格・検定団体からの認定申請を受けて審査し、認定した資格・検定試験を公表する。

※ 英語以外の外国語について、共通テストにおける外国語は、平成 32 年度以降も当面実施する。さらに、資格・検定試験との関係については、英語の詳細な制度設計の検討状況を踏まえ、引き続き検討する。

8. マークシート式問題の改善

○ 思考力・判断力・表現力を一層重視した作問への改善

次期学習指導要領の方向性を踏まえ、各教科・科目の特性に応じ、より「思考力・判断力・表現力」を重視した作問となるよう改善を図る。

- 最終報告を踏まえ、マークシート式問題について、各教科・科目の特性や難易度を含む識別力の観点も踏まえつつ、思考力・判断力・表現力を一層重視した作問への改善を図るため、例えば、次のような点に留意する。
 - ・ 出題者が問題文で示した流れに沿って解答するだけでなく、問題解決のプロセスを自ら選択しながら解答する部分が含まれるよう工夫すること
 - ・ 複数のテキストや資料を提示し、必要な情報を組み合わせ思考・判断させること
 - ・ 分野の異なる複数の文章の深い内容を比較検討させること
 - ・ 学んだ内容を日常生活と結びつけて考えさせること
 - ・ 他の教科・科目や社会との関わりを意識した内容を取り入れること
 - ・ 正解が一つに限られない問題とすること
 - ・ 選択式でありながら複数の段階にわたる判断を要する問題とすること
 - ・ 正解を選択肢の中から選ばせるのではなく必要な数値や記号等をマークさせること
- 学習指導要領の趣旨・内容との連携をよりの確に確保するとともに、評価すべき能力や作問の構造を実際の作題に確実に反映するため、高等学校関係者や、高等学校教育の実態をよく把握している大学教員等を積極的に作題委員として委嘱するなど、作題方針や体制の抜本的な見直しに取り組む。
 - ※ 「フィージビリティ検証事業」において、モデル問題（国語、数学、物理、世界史）の公表に向け、作題やモニター調査を実施。
 - ※ センターにおいては、記述式問題導入・マークシート式問題改善について、学習指導要領の趣旨・内容との連携をよりの確に確保するとともに、評価すべき能力や作問の構造を実際の作題に確実に反映するため、作題委員構成の見直し、作題委員の人材確保を含めた作題方針・体制の抜本的な見直しが必要。

9. 結果の表示

(1) マークシート式問題

各大学において、入学者受入れ方針に応じたきめ細かい選抜に活用できるよう、大学のニーズも踏まえつつ、現行の大学入試センター試験よりも詳細な情報を大学に提供する。

提供する情報の内容については、以下の事項を含め、今後、プレテスト等の状況も踏まえつつ検討し、平成29年度中に結論を得る。

- ・ 設問、領域、分野ごとの正答数や平均正答率、得点分布
- ・ 主として知識・技能を中心に評価する問題と、主として思考力・判断力・表現力を中心に評価する問題のそれぞれの正答数や平均正答率、得点分布
- ・ 全受検者の中での当該受検者の成績を表す段階別表示
- ・ 国語における「近代以降の文章」「古文」「漢文」ごとの成績の取扱い 等

※ 大学が指定した教科・科目については、全ての問の結果の活用を求める。

(2) 記述式問題

設問ごとに設定した条件への適合性を判定し、その結果を段階別表示で表すことなどについて検討する。

結果の表示の仕方については、国語、数学の科目特性や試験問題の構成の在り方も踏まえ、プレテスト等を通じて明確化する。

- 結果表示については、テストの全体設計を踏まえた成績表示の具体的内容、項目、表示方法等について、科目特性や試験問題の構成の在り方、大学のニーズなどを踏まえつつ、段階別表示について、プレテスト等を通じて明確化していく。
- また、各大学が、合否判定を行う際に、アドミッション・ポリシーに基づいて得点比重をかけることができるような情報を提供する。
- さらに、今後各大学が多面的・総合的な評価を実施するためには、マークシート式、記述式、英語4技能評価、調査書や面接など多様な指標を用いた選抜を行うことになることから、各指標を組み合わせて選抜に活用するための参考となるイメージを提供することを検討する。
- なお、現行のセンター試験の国語における古典の取り扱いとして、「近代以降の文章」「古文」「漢文」の3分野を別々に成績提供しているが、以下の点を踏まえ、今後、「国語」として一括して成績提供することを検討する【別紙10】。

- ① 平成25年度からの高等学校学習指導要領では、古典を含む国語総合が、すべての高校生が共通に履修する「共通必修科目」として設定されていること。
 - ② 試験時間の不平等を解消する必要があること。
※「国語」の試験時間内で、古典を課さない大学の受験者は大問4問中2問を解答すれば良い。
 - ③ 古文や漢文と現代文の融合問題等の作題の工夫が可能となること。
- また、記述式について、条件適合性を判定し、その結果を段階別で表示することについては、例えば、設問により異なるが、複数段階（3～5段階程度）で表示することを想定している。引き続き、プレテスト等を通じ、問題の内容等に応じて明確化する。

10. 実施期日等

- マークシート式問題と国語、数学の記述式問題は同一日程で、当該教科の試験時間内に実施する。
- 実施時期は、1月中旬の2日間とする。
- 成績提供時期については、現行の「私立1月31日」「国公立2月2日」の設定（平成29年度入試の場合）から、記述式問題のプレテスト等を踏まえ、1週間程度遅らせる方向で検討する。

- 記述式の導入に伴い、採点期間を20日間程度確保する必要がある見込みであることから、成績提供時期について、現行の「私立1月31日」「国公立2月2日」の設定（平成29年度入試の場合）について、1週間程度遅らせる可能性を検討することが必要である【別紙11】。
- なお、実施時期の前倒しは、多くの大学への年末の輸送や、大学でのテスト問題の保管等が必要となり、輸送・保管警備経費の増加や、問題漏えいのリスクが増大するため、適当ではないと考えられる。
- 実施時期についてはプレテスト等を通じて、明確化する。

11. その他

- 出題教科・科目の試験時間、実施期日・成績提供時期、実施上の配慮事項（試験場の割当て、障害等のある受検者に対する配慮、再試験・追試験の実施）、実施方法等に関する要項（時間割、検定料、成績の本人への通知等）の取扱いについては、プレテスト等を通じて引き続き検討し、今後、実施大綱（平成31年度初頭目途に策定・公表予定）のほか、適切な時期に順次公表する。

なお、検定料については、受検者の経済的負担に配慮して所要の検討を行う。

※ 障害のある受検者に対しては、引き続き合理的な配慮を行う。

- プレテストの実施内容やスケジュールは別表2のとおり。

なお、プレテストを通じて新テストにおける試験問題の検討を行い、その結果を公表する。

- 正式実施までのスケジュール

別表3のとおり。

※ CBTの導入については、引き続きセンターにおいて、導入に向けた調査・検証を実施。平成29年度については、問題素案の集積方法の検討及び集積等を行う。

この成果も踏まえ、平成36年度以降の複数回実施の実現可能性を検討する。

- 出題教科・科目の試験時間（記述式の問題構成を含む）・時間割等は、プレテスト等の結果も踏まえ見極めていく。

（参考）学習指導要領改訂時のセンター試験の教科・科目等の見直しの際は、試験時間・時間割、実施期日・成績提供時期、検定料、成績の本人通知の内容等は、実施大綱（実施年度の前年）又は実施要項（実施年度）で示しているところである。

※記述式問題（国語、数学）及びマークシート式問題（国語、数学、物理、世界史）のモデル問題は、実施方針とともに、平成29年度初頭に公表を予定している。

- 平成30年度に新テストと同様の形式でプレテストを実施することを踏まえ、平成29年度は、そのための検証も含めたテストを実施する。その他、CBTの導入に向けた検討を行う。

【平成29年度】

- ・テストの実施内容等に関する検討
- ・記述式問題を含む試験問題の作成・検証・分析
- ・記述式問題の採点マニュアル等の作成
- ・プレテスト用テスト実施システムの構築
- ・採点支援技術の構築・検証
- ・テストの実施・採点
(記述式問題：5万人規模、マークシート問題：千人超の規模)

【平成30年度】

- ・実施体制、採点体制等について、新テストを想定した形式で実施。

【平成31年度】

- ・平成30年度の実施結果を踏まえ、改善すべき内容等を把握の上、必要に応じてテストを実施。

- 別表2のスケジュールのもと、平成32年度から新テストを円滑かつ着実に導入する。

(別表1) 出題教科・科目

教科等	出題科目	出題方法等	備考
国語	『国語』	「国語総合」の全ての内容を出題範囲とする。	『国語』の出題には記述式問題を含む(古文、漢文を除く。)
地理歴史	「世界史A」 「世界史B」 「日本史A」 「日本史B」 「地理A」 「地理B」	左記の6科目は、それぞれの科目の全ての内容を出題範囲とする。	
公民	「現代社会」 「倫理」 「政治・経済」 『倫理, 政治・経済』	「現代社会」、「倫理」及び「政治・経済」はそれぞれの科目の全ての内容を出題範囲とする。 『倫理, 政治・経済』は、「倫理」と「政治・経済」を総合した出題範囲とする。	
数学	「数学Ⅰ」 『数学Ⅰ・数学A』 「数学Ⅱ」 『数学Ⅱ・数学B』	「数学Ⅰ」「数学Ⅱ」は、それぞれの科目の全ての内容を出題範囲とする。 『数学Ⅰ・数学A』は、「数学Ⅰ」と「数学A」を総合した出題範囲とする。 ただし、「数学A」については、「場合の数と確率」「整数の性質」「図形の性質」の3項目の内容のうち2項目以上を学習した者に対応した出題とし、問題を選択解答させる。 『数学Ⅱ・数学B』は、「数学Ⅱ」と「数学B」を総合した出題範囲とする。 ただし、「数学B」については、「数列」「ベクトル」「確率分布と統計的な推測」の3項目の内容のうち2項目以上を学習した者に対応した出題とし、問題を選択解答させる。	「数学Ⅰ」及び『数学Ⅰ・数学A』の出題には記述式問題を含む。「数学Ⅰ」・『数学Ⅰ・数学A』の記述式問題の出題範囲は、「数学Ⅰ」とする。
理科	「物理基礎」 「化学基礎」 「生物基礎」 「地学基礎」 「物理」 「化学」	左記の8科目は、それぞれの科目の全ての内容を出題範囲とする。	

	「生物」 「地学」		
外国語	『英語』 『ドイツ語』 『フランス語』 『中国語』 『韓国語』	『英語』は、「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「英語表現Ⅰ」を出題範囲とする。 『英語』以外の外国語科目は、英語(リスニングを除く。)に準ずる。	『英語』はリスニングを含む。
専門学科に関する科目	『簿記・会計』 『情報関係基礎』	『簿記・会計』は、「簿記」及び「財務会計Ⅰ」を総合した出題範囲とし、「財務会計Ⅰ」については、株式会社の会計の基礎的事項を含め、「財務会計の基礎」を出題範囲とする。 『情報関係基礎』は、専門教育を主とする農業、工業、商業、水産、家庭、看護、情報及び福祉の8教科に設定されている情報に関する基礎的科目を出題範囲とする。	

(注1) 「 」 『 』 内記載のものを1出題科目とする。

(注2) 「 」 で記載されている科目は、高等学校学習指導要領上設定されている科目を表し、
『 』 はそれ以外の科目を表す。

(別表2) プレテストの実施内容・スケジュール

(別表3) 正式実施までのスケジュール

平成29年度大学入試センター試験（本試験）科目別受験者数及び平均点について

別紙1

受験者数 547,591人

教科名	科目名	受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	教科名	科目名	受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	
国語 (200点)	国語	519,129	106.96 (53.48)	200 (100)	0 (0)	35.44 (17.72)	数 学	数学① (100点)	数 学 I	6,156	34.02	98	0	19.95
									数 学 I ・ 数 学 A	394,557	61.12	100	0	21.35
地理歴史 (100点)	世界史 A	1,329	42.83	97	0	18.26		数学② (100点)	数 学 II	5,971	25.11	98	0	15.63
									数 学 II ・ 数 学 B	353,836	52.07	100	0	24.29
	世界史 B	87,564	65.44	100	0	22.80		簿 記 ・ 会 計	1,482	49.83	98	8	19.75	
								情 報 関 係 基 礎	524	54.94	98	0	17.06	
	日本史 A	2,559	37.47	97	0	17.16	理 科	理科① (50点)	物 理 基 礎	19,406	29.69 (59.38)	50 (100)	0 (0)	11.87 (23.74)
									化 学 基 礎	109,795	28.59 (57.18)	50 (100)	0 (0)	10.87 (21.74)
日本史 B	167,514	59.29	100	0	20.14	生 物 基 礎		136,170	39.47 (78.94)	50 (100)	0 (0)	9.56 (19.12)		
						地 学 基 礎		47,506	32.50 (65.00)	50 (100)	0 (0)	10.48 (20.96)		
地理 A	1,901	57.08	97	11	16.27	理科② (100点)		物 理	156,719	62.88	100	0	22.45	
								化 学	209,400	51.94	100	0	20.86	
地理 B	150,723	62.34	100	0	15.54		生 物	74,676	68.97	100	0	17.65		
							地 学	1,660	53.77	100	0	19.77		
公 民 (100点)	現代社会	76,490	57.41	100	0	17.72	外国語	【筆記】 (200点)	英 語	540,029	123.73 (61.86)	200 (100)	0 (0)	44.95 (22.47)
									ド イ ツ 語	116	128.66 (64.33)	197 (98)	30 (15)	45.83 (22.91)
	フ ラ ン ス 語	134	142.60 (71.30)	200 (100)	37 (18)	44.41 (22.20)								
	中 国 語	558	164.91 (82.45)	200 (100)	42 (21)	33.49 (16.74)								
	韓 国 語	185	128.95 (64.47)	200 (100)	28 (14)	41.00 (20.50)								
	倫 理	22,022	54.66	98	0	16.05		【リスニング】 (50点)	英 語	532,627	28.11 (56.22)	50 (100)	0 (0)	10.17 (20.34)
政治・経済	54,243	63.01	100	0	17.87									
倫理, 政治・経済	50,486	66.63	100	0	14.90									

(注1) 平均点, 最高点, 最低点及び標準偏差欄の()内の数値は, 100点満点に換算したものである。

出題教科・科目について（案）

- 出題教科・科目等の構成については、受験者数・成績提供者数の動向や各大学の試験科目の位置づけの状況とともに、学習指導要領の内容等も勘案しつつ、高校生の科目選択の幅に配慮した結果、現行の教科・科目を基本として実施する。
- 次期学習指導要領では、高等学校の教科・科目の構成が抜本的に見直されることを踏まえ、新テストの教科・科目の簡素化を含めた抜本的な見直しを図る。

対象科目	学習指導要領との関係	大学における指定状況	考え方
<ul style="list-style-type: none"> ○ 「数学Ⅰ」と「数学Ⅰ・数学A」 ○ 「数学Ⅱ」と「数学Ⅱ・数学B」 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「数学Ⅰ」は共通必修科目 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「数学Ⅰ」「数学Ⅱ」は利用していない大学が多いものの、教科(数学科)内の選択科目として活用 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 数学Ⅰは共通必修科目であり、高校によっては、これのみを履修している場合がある。 ○ 数学Ⅱ、数学Bとも選択履修であり、高校によっては、数学Ⅱのみを履修している場合がある。 ○ 出題科目の一本化により、必須解答と選択解答の問題が混在するため、複雑で混乱が生じる恐れがある。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 「簿記・会計」 ○ 「情報関係基礎」 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「簿記・会計」は商業高校では必修科目 ○ 専門高校は、情報に関する基礎的科目が原則必修 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「簿記・会計」「情報関係基礎」は、教科(数学科)内の選択科目として活用 	<p>< 「簿記・会計」 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 特に商業高校を中心に国公立大学等を受験する際の数学の代替科目となっている。 <p>< 「情報関係基礎」 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 専門高校では、各学科の情報関係科目の学習を基にした数学の代替科目となっている。 ○ 次期学習指導要領下での教科「情報」を踏まえたテストの位置づけを見据え、作題体制等を維持する必要。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 「世界史A」と「世界史B」、 ○ 「日本史A」と「日本史B」、 ○ 「地理A」と「地理B」、 ○ 「倫理」「政治・経済」と「倫理、政治・経済」 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「世界史A」及び「世界史B」から1科目を選択履修 ○ 「日本史A」、「日本史B」「地理A」及び「地理B」から1科目を選択履修 ○ 「現代社会」又は「倫理」「政治・経済」から選択履修 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「世界史A」「日本史A」「地理A」は、教科内又は教科をまたぐ選択科目として活用 ○ 「倫理」「政治・経済」は、教科(公民科)内又は教科をまたぐ選択科目として活用 	<p>< 「世界史A」「日本史A」「地理A」 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 高校によっては、A科目のみを選択履修している場合がある。 <p>< 「倫理」「政治・経済」 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 選択科目の一つとしている大学が募集単位で4～5割程度存在。 <p>※次期学習指導要領下での教科「歴史総合」「地理総合」「公共」のテストの位置づけを見据え、作題体制等を維持する必要。</p>

センター試験利用状況(全募集単位の募集単位数。カッコ内は%)

	1. 必須	2. 教科内選択	3. 教科をまたぐ選択	4. 利用していない	計
国語	6794 (13.8%)	43 (0.1%)	4798 (9.8%)	37478 (76.3%)	49113
世界史A	0 (0.0%)	1598 (3.3%)	4648 (9.5%)	42867 (87.3%)	49113
世界史B	0 (0.0%)	3127 (6.4%)	6528 (13.3%)	39458 (80.3%)	49113
日本史A	0 (0.0%)	1598 (3.3%)	4646 (9.5%)	42869 (87.3%)	49113
日本史B	1 (0.0%)	3126 (6.4%)	6529 (13.3%)	39457 (80.3%)	49113
地理A	0 (0.0%)	1596 (3.2%)	4680 (9.5%)	42837 (87.2%)	49113
地理B	0 (0.0%)	3089 (6.3%)	6427 (13.1%)	39597 (80.6%)	49113
現代社会	0 (0.0%)	2477 (5.0%)	6331 (12.9%)	40305 (82.1%)	49113
倫理	0 (0.0%)	2277 (4.6%)	6129 (12.5%)	40707 (82.9%)	49113
政治・経済	0 (0.0%)	2293 (4.7%)	6269 (12.8%)	40551 (82.6%)	49113
倫理, 政治・経済	1 (0.0%)	3044 (6.2%)	6299 (12.8%)	39769 (81.0%)	49113
数学I	0 (0.0%)	1818 (3.7%)	4588 (9.3%)	42707 (87.0%)	49113
数学I・数学A	3311 (6.7%)	2204 (4.5%)	6214 (12.7%)	37384 (76.1%)	49113
数学II	0 (0.0%)	1871 (3.8%)	4442 (9.0%)	42800 (87.1%)	49113
数学II・数学B	1334 (2.7%)	3919 (8.0%)	5417 (11.0%)	38443 (78.3%)	49113
簿記・会計	0 (0.0%)	2998 (6.1%)	3661 (7.5%)	42454 (86.4%)	49113
情報関係基礎	0 (0.0%)	3095 (6.3%)	3686 (7.5%)	42332 (86.2%)	49113
物理基礎	1 (0.0%)	2568 (5.2%)	5227 (10.6%)	41317 (84.1%)	49113
化学基礎	1 (0.0%)	2728 (5.6%)	5434 (11.1%)	40950 (83.4%)	49113
生物基礎	0 (0.0%)	2659 (5.4%)	5439 (11.1%)	41015 (83.5%)	49113
地学基礎	0 (0.0%)	2160 (4.4%)	4798 (9.8%)	42155 (85.8%)	49113
物理	476 (1.0%)	4213 (8.6%)	5558 (11.3%)	38866 (79.1%)	49113
化学	356 (0.7%)	4532 (9.2%)	5769 (11.7%)	38456 (78.3%)	49113
生物	33 (0.1%)	4429 (9.0%)	5790 (11.8%)	38861 (79.1%)	49113
地学	0 (0.0%)	3158 (6.4%)	4986 (10.2%)	40969 (83.4%)	49113
英語(筆記)	3278 (6.7%)	5073 (10.3%)	3951 (8.0%)	36811 (75.0%)	49113
英語リスニング	2272 (4.6%)	4761 (9.7%)	2471 (5.0%)	39609 (80.6%)	49113
ドイツ語	0 (0.0%)	4750 (9.7%)	1914 (3.9%)	42449 (86.4%)	49113
フランス語	0 (0.0%)	4734 (9.6%)	1918 (3.9%)	42461 (86.5%)	49113
中国語	0 (0.0%)	4626 (9.4%)	1877 (3.8%)	42610 (86.8%)	49113
韓国語	0 (0.0%)	4477 (9.1%)	1864 (3.8%)	42772 (87.1%)	49113

センター試験利用状況(国公立大学の一般入試の募集単位数。カッコ内は%)

	1. 必須	2. 教科内選択	3. 教科をまたぐ選択	4. 利用していない	計
国語	3027 (93.5%)	0 (0.0%)	97 (3.0%)	112 (3.5%)	3236
世界史A	0 (0.0%)	934 (28.9%)	775 (23.9%)	1527 (47.2%)	3236
世界史B	0 (0.0%)	1938 (59.9%)	1055 (32.6%)	243 (7.5%)	3236
日本史A	0 (0.0%)	934 (28.9%)	775 (23.9%)	1527 (47.2%)	3236
日本史B	0 (0.0%)	1938 (59.9%)	1055 (32.6%)	243 (7.5%)	3236
地理A	0 (0.0%)	933 (28.8%)	775 (23.9%)	1528 (47.2%)	3236
地理B	0 (0.0%)	1937 (59.9%)	1055 (32.6%)	244 (7.5%)	3236
現代社会	0 (0.0%)	1468 (45.4%)	979 (30.3%)	789 (24.4%)	3236
倫理	0 (0.0%)	1333 (41.2%)	963 (29.8%)	940 (29.0%)	3236
政治・経済	0 (0.0%)	1333 (41.2%)	963 (29.8%)	940 (29.0%)	3236
倫理, 政治・経済	0 (0.0%)	1931 (59.7%)	1050 (32.4%)	255 (7.9%)	3236
数学I	0 (0.0%)	728 (22.5%)	230 (7.1%)	2278 (70.4%)	3236
数学I・数学A	1982 (61.2%)	827 (25.6%)	376 (11.6%)	51 (1.6%)	3236
数学II	0 (0.0%)	799 (24.7%)	284 (8.8%)	2153 (66.5%)	3236
数学II・数学B	506 (15.6%)	2210 (68.3%)	387 (12.0%)	133 (4.1%)	3236
簿記・会計	0 (0.0%)	2056 (63.5%)	334 (10.3%)	846 (26.1%)	3236
情報関係基礎	0 (0.0%)	2078 (64.2%)	335 (10.4%)	823 (25.4%)	3236
物理基礎	0 (0.0%)	1220 (37.7%)	555 (17.2%)	1461 (45.1%)	3236
化学基礎	0 (0.0%)	1247 (38.5%)	570 (17.6%)	1419 (43.9%)	3236
生物基礎	0 (0.0%)	1241 (38.3%)	570 (17.6%)	1425 (44.0%)	3236
地学基礎	0 (0.0%)	1124 (34.7%)	561 (17.3%)	1551 (47.9%)	3236
物理	273 (8.4%)	2206 (68.2%)	613 (18.9%)	144 (4.4%)	3236
化学	179 (5.5%)	2298 (71.0%)	619 (19.1%)	140 (4.3%)	3236
生物	18 (0.6%)	2314 (71.5%)	620 (19.2%)	284 (8.8%)	3236
地学	0 (0.0%)	1838 (56.8%)	576 (17.8%)	822 (25.4%)	3236
英語(筆記)	465 (14.4%)	2671 (82.5%)	95 (2.9%)	5 (0.2%)	3236
英語リスニング	443 (13.7%)	2657 (82.1%)	93 (2.9%)	43 (1.3%)	3236
ドイツ語	0 (0.0%)	2662 (82.3%)	86 (2.7%)	488 (15.1%)	3236
フランス語	0 (0.0%)	2664 (82.3%)	86 (2.7%)	486 (15.0%)	3236
中国語	0 (0.0%)	2619 (80.9%)	85 (2.6%)	532 (16.4%)	3236
韓国語	0 (0.0%)	2580 (79.7%)	85 (2.6%)	571 (17.6%)	3236

大学入試センターにおける新テスト（「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」）の検討・準備体制について

別紙2

大学入学希望者学力評価テスト（仮称） （平成32年度実施）

○新テストの実施方針（平成29年度初頭）

- ・対象教科・科目の出題内容と範囲，テスト実施時期
- ・記述式の実施方法，採点方法・体制，成績表示
- ・民間試験を活用した英語四技能評価の方法
- ・正式実施までのスケジュール
- ・名称 等

○モデル問題〈国語，数学，物理，世界史〉の公表 （平成29年度初頭）

○プレテストの実施（平成29～31年度）

文部科学省

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」検討・準備グループ

- 作問方法検討チーム
- 採点方法検討チーム

※平成28年8月31日「高大接続改革の検討状況」を公表

連携協力

新テスト実施企画本部

平成28年6月1日設置
本部長：理事長

平成28年8月～
専属7人体制

※うち試験問題企画官2名を配置〔国語，数学〕

○フィージビリティ検証事業実施

- ・記述式問題の導入（国語及び数学の作問，結果表示〈段階表示の在り方〉，採点方法・体制〈民間活用，採点支援システム〉，その他実施方法に係る事項）
- ・マークシート式問題の改善（思考力・判断力を一層重視した作問への改善，結果表示〈多様な情報の提供〉等）
- ・英語四技能評価（民間の試験の活用方法等を含む）

※特に28年度は，モデル問題の公表に向けて作題，モニター調査を実施

○作題方針・作題体制の見直し（評価すべき能力や作問の構造を作題に確実に反映，作題委員構成，委員への人材確保のための実効性ある方策）

○簡素化の方向を踏まえた出題科目の決定，各教科・科目における試験問題の構成検討（難易度，試験時間・問題数など）

○CBT導入に関する運用方法の検討

○プレテスト実施に向けた具体的な検討，作題

○新テスト実施企画委員会

○問題調査研究部会

国語WG

数学WG

地理歴史公民WG（世界史・日本史・地理・現代社会）

理科WG（物理・化学・生物・地学）

○記述式実施企画部会

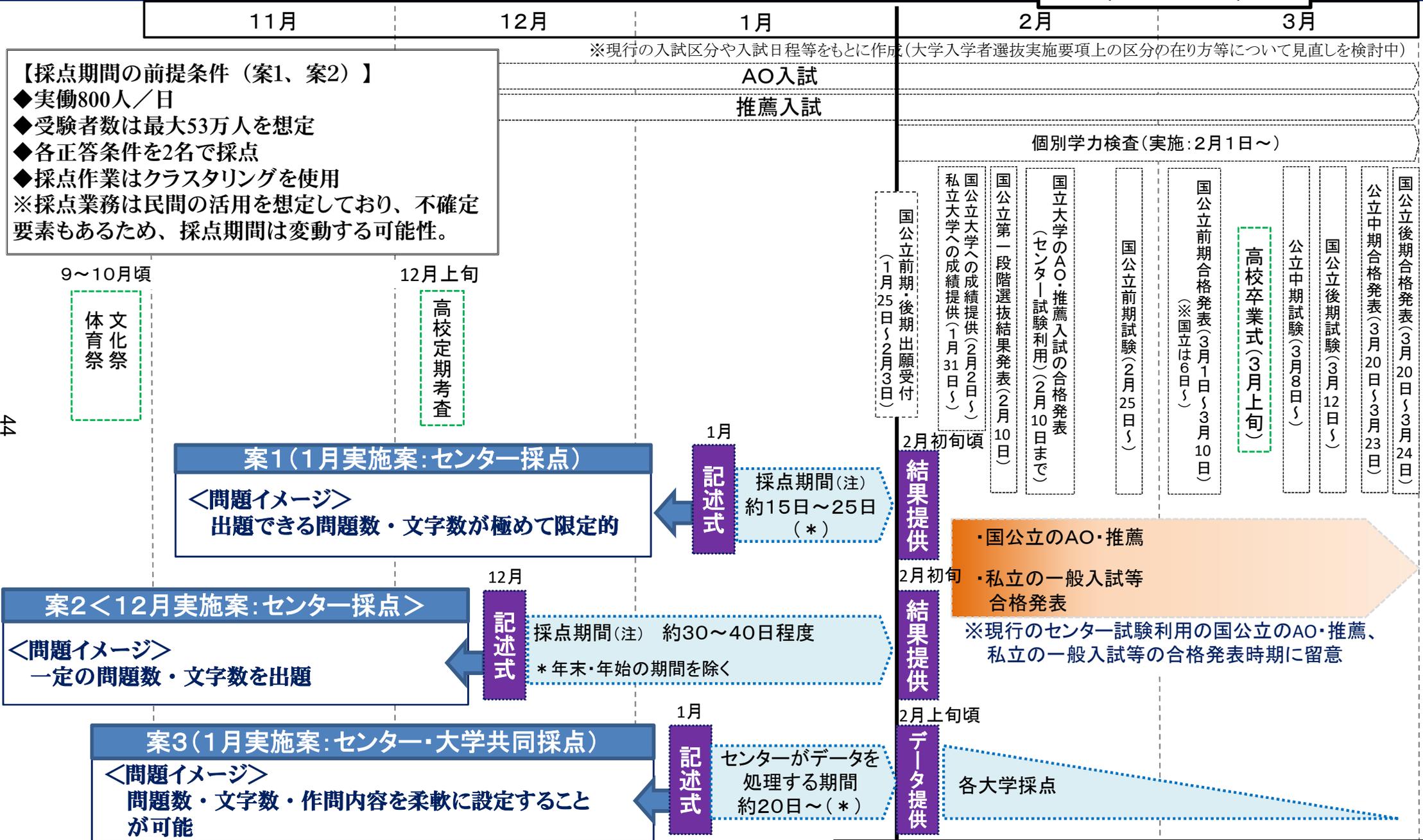
○英語四技能実施企画部会

実施方法WG

問題作成WG

大学入試センター

「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の記述式の実施方法・時期のイメージ(たたき台)



(*) 実施時期を早めたり、結果提供の時期を遅らせることも検討。
(注) 採点期間には、採点の事前・事後の、採点基準の確定、研修、成績提供準備等に係る期間を含む。

【共同採点の仕組み(案3)の一例】
◆センター：採点基準作成、一定の処理(クラスタリング、形式面での確認等)
◆利用大学：内容面の採点、判定
※採点に係る役割分担について、今後、大学関係者等と調整

1. 記述式の導入趣旨

- 大学入学者選抜においては、現行の高等学校学習指導要領において、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・表現力等を育むため、言語活動(例:説明、論述、討論等)を重視していることを考慮する必要。
- このことは、初年次教育の効果的な実施など大学教育改革にも寄与。

<共通テスト>

- 左記の趣旨を実現するためには、各大学が個別試験で学習指導要領の内容を踏まえた記述式試験を全受験生に実施することが望ましいが、国立大学の個別試験でも記述式が約4割にとどまっている現状を踏まえ、各大学の負担をより少なくし、幅広く利用できるようにするため、共通テストでの出題を検討しているところ。

<個別選抜>

- 各大学の個別選抜においては、共通テストの積極的な活用を図るとともに、現行の高等学校学習指導要領を踏まえ、作問の改善や小論文等の導入を図ることが重要。

45

2. 共通テストの記述式について

- 各大学が共通テストの記述式の採点を行う案(いわゆる第3案)は、限られた期間の中で実施でき、作問内容の柔軟な設定が可能となるなどの点で優れた選択肢。
- 一方、上記1.の趣旨を実現するためには、大学の負担・体制や私立大学の入試日程、個別選抜との関係等も考慮しつつ、多くの大学が共通テストの記述式を活用できる選択肢も用意する必要。

パターン1:センターが形式面を確認、各大学が採点

- センターが形式面(字数・引用等)を確認するとともに、各大学に答案・採点基準と併せ提供。各大学の判断で採点・活用。

パターン2:センターが段階別表示、各大学で確認
※実現可能性について、更に検討が必要

- センターが段階別表示まで行い、各大学に答案と併せ提供。各大学で確認・活用。
※評価すべき能力の測定、採点可能性、識別力の観点を踏まえつつ、実現可能性について、フィージビリティ検証等を通じて見極めていく。

○ 新テストの実施方針で左記の取扱いを提示

○ 共通テストの記述式の活用を促進

※平成32年度以降、作題や採点の知見の積み重ねにより、作題の工夫、採点精度、識別力の一層の向上を図る。
 ※平成36年度以降は、平成32年度からの実施状況やC B T等の技術開発の状況等を踏まえつつ、更なる改善を図る。

共通テスト・個別試験の記述式に関する新センターと大学の役割分担

別紙5

-国立大学協会としての考え方(12月8日)を踏まえたイメージ-

		問題作成	出題 (テストの実施)	採点
<p>○基盤的能力を問う問題 (短文記述式)</p> <p>※ 国立大学の一般入試の全受験生に課す方向で検討する。</p>	パターン2	新センター	新センター	新センター
<p>○より深く能力を問う問題 (より文字数の多い問題)</p> <p>※ 個別試験で課すべき記述式試験の選択肢の一つ。</p>	パターン1	新センター	新センター	大学
	パターン1' (注1)	新センター	大学	大学
<p>○高度な記述式問題(注2)</p> <p>※ 全ての国立大学受験生に課すことを目指す。 作題困難な大学は、複数大学で作題又は当面パターン1の活用もありうる。</p>	個別試験	大学	大学	大学

※ 「大学入学者選抜における国立大学協会としての考え方」(12月8日)に盛り込まれている内容。

(注1)「国立大学協会としての考え方」において、パターン1の選択肢の一つとして例示。

(注2)「国立大学協会としての考え方」において、例えば、複数の素材を編集・操作し、自らの考えを立論し、さらにそれを表現するプロセスを評価できる問題。

そのような問題を各大学(学部)がアドミッション・ポリシーに基づいて作題し、大学入学者選抜要項等において出題意図、求める能力等を明確にした上で受験生に課す。

【国語】解答させる内容（問題の例）と資質・能力、出題形式との関係について（素案）

学習指導要領の見直しの内容等も踏まえ、下記について更に整理する。

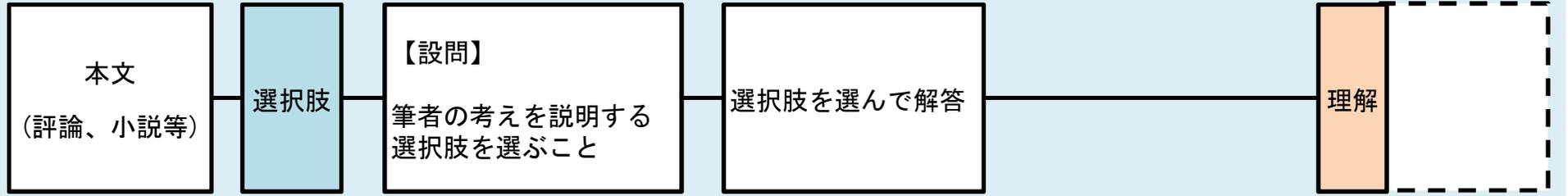
	構造と内容の把握	精査・解釈	考えの形成			
	知識・技能 (略)	【創造的・論理的思考の側面】 > 情報を多角的・多面的に精査し構造化する力 ・推論及び既有知識による内容の補足、精緻化 ・論理(情報と情報の関係性: 共通-相違、原因-結果、具体-抽象等)の吟味・構築 ・妥当性、信頼性等の吟味 > 構成・表現形式を評価する力 【感性・情緒の側面】 > 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力 > 構成・表現形式を評価する力 【他者とのコミュニケーションの側面】 > 言葉を通じて伝え合う力 ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解 ・自分の意思や主張の伝達 ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り > 構成・表現形式を評価する力	考えの形成・深化 > 考えを形成し深める力 ・情報を編集・操作する力 考えの形成・深化 > 考えを形成し深める力 ・新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力			
テキストの内容や解釈を解答する問題	①テキストの部分の把握、精査・解釈 ※テキストの部分を把握、精査・解釈して解答する問題 ①選択式・短答式	構造や内容を把握して、テキストに挿入すべき語句を答える 構造や内容を把握して、テキストの内容を答える テキストの中における、比喩表現の示す内容を答える テキストの中における、抽象的表現や難しい表現の意味内容を答える	構造や内容を把握して、テキストに挿入すべき語句を答える 構造や内容を把握して、テキストの内容を答える テキストの中における、比喩表現の示す内容を答える テキストの中における、抽象的表現や難しい表現の意味内容を答える	○テキストに書かれていること(構造や内容)を把握した上で、テキストの一部分から精査・解釈する ○テキストに含まれている情報について答える		
	②テキストの全体の把握、精査・解釈 ※テキストの全体を把握、精査・解釈して解答する問題 ②選択式・条件付記述式	テキストにおける筆者の主張とその主張の理由・根拠を説明する 国語①(ガイドライン)第1問 テキストに表現された事物について、目的・場面・文脈・状況等を説明する テキストの会話や表現等に着目して、登場人物の心情の変化等を説明する テキストを通じて対比されている事項について考察し、共通点や相違点について説明する 条件として示された目的等に応じてテキスト全体を要約し、論旨に沿って説明する	テキストにおける筆者の主張とその主張の理由・根拠を説明する テキストに表現された事物について、目的・場面・文脈・状況等を説明する テキストの会話や表現等に着目して、登場人物の心情の変化等を説明する テキストを通じて対比されている事項について考察し、共通点や相違点について説明する 条件として示された目的等に応じてテキスト全体を要約し、論旨に沿って説明する	○テキストに書かれていること(構造や内容)を把握した上で、テキスト全体から精査・解釈する ○テキストに含まれている情報について答える ○テキストに書かれていること(構造や内容)を把握した上で、テキスト全体から精査・解釈し、それに基づき考えを形成する ○テキストに含まれている情報に基づく考えについて答える		
	考えを解答する問題	③テキストの精査・解釈に基づく考えの形成 ※テキストの精査・解釈に基づく考えを解答する問題 ③選択式・条件付記述式	テキスト全体の論旨を把握し、推論による内容の補足をして、筆者の主張について論じる テキスト全体の論旨を把握し、既有知識や経験による内容の精緻化を行って論じる 国語①(ガイドライン)第3問 国語②(契約書)第1問 テキスト全体の論旨を把握し、条件として示された目的等に応じて必要な情報を付加、統合して比較したり、関連づけたりして論じる 国語①(ガイドライン)第3問 国語②(契約書)第3問 複数のテキストの妥当性を吟味し、情報を統合・構造化して論じる 国語①(ガイドライン)第4問 国語②(契約書)第2問 条件として示された目的等に応じて、考えを形成して論じる	テキスト全体の論旨を把握し、推論による内容の補足をして、筆者の主張について論じる テキスト全体の論旨を把握し、既有知識や経験による内容の精緻化を行って論じる テキスト全体の論旨を把握し、条件として示された目的等に応じて必要な情報を付加、統合して比較したり、関連づけたりして論じる 複数のテキストの妥当性を吟味し、情報を統合・構造化して論じる 条件として示された目的等に応じて、考えを形成して論じる	○テキストに書かれていること(構造や内容)を把握した上で、テキスト全体から精査・解釈し、それを踏まえながら発展的に自分の考えを形成する ○(テキストに含まれている情報を用いつつ、)テキストに含まれていない自分の考えについて答える	
		④テキストの精査・解釈を踏まえた自分の考えの形成	テキストにおける筆者の主張を踏まえつつ、自分の考えを形成して論じる	テキストにおける筆者の主張を踏まえつつ、自分の考えを形成して論じる	テキストにおける筆者の主張を踏まえつつ、自分の考えを形成して論じる	
		※テキストの精査・解釈を踏まえて発展させた自分の考えを解答する問題 ④自由記述式・小論文	テキストに示された図表等の情報を分析した上で、仮説を立てて、自分の考えを論じる	テキストに示された図表等の情報を分析した上で、仮説を立てて、自分の考えを論じる	テキストに示された図表等の情報を分析した上で、仮説を立てて、自分の考えを論じる	テキストに示された図表等の情報を分析した上で、仮説を立てて、自分の考えを論じる
			テキストの論旨を踏まえて、既有知識・経験を具体的に挙げながら、自分の考えを論じる	テキストの論旨を踏まえて、既有知識・経験を具体的に挙げながら、自分の考えを論じる	テキストの論旨を踏まえて、既有知識・経験を具体的に挙げながら、自分の考えを論じる	テキストの論旨を踏まえて、既有知識・経験を具体的に挙げながら、自分の考えを論じる
	テキストを踏まえて、テキストと自分自身との関わりについて考えたり、想像したりして、自分の考えを形成して論じる	テキストを踏まえて、テキストと自分自身との関わりについて考えたり、想像したりして、自分の考えを形成して論じる	テキストを踏まえて、テキストと自分自身との関わりについて考えたり、想像したりして、自分の考えを形成して論じる	テキストを踏まえて、テキストと自分自身との関わりについて考えたり、想像したりして、自分の考えを形成して論じる		

※解答させる内容と資質・能力、出題形式との関係は、代表的な例を挙げているものであり、問い方や場面等によっては別の出題形式等で問う可能性もあり得る。

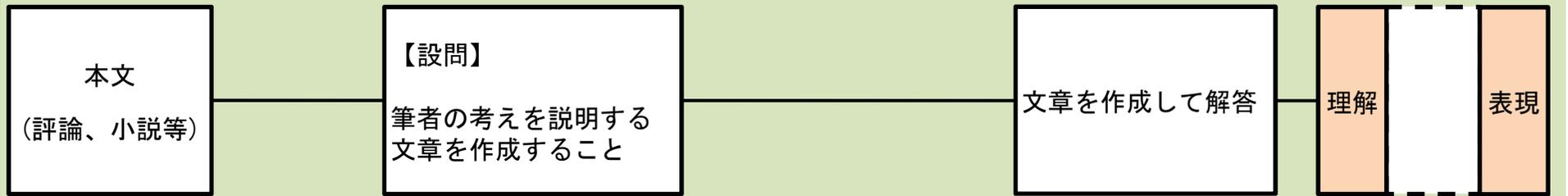
※ここでの「テキスト」は、文章、及び、文章になっていない断片的な言葉、言葉が含まれる図表などの文章以外の情報を含む。

大学入学者選抜における記述式の導入について(イメージ)

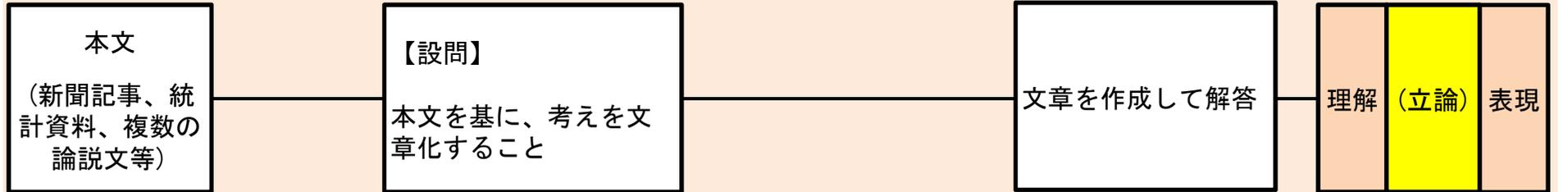
●選択式：設問に添ってふさわしい選択肢を選ぶ問題



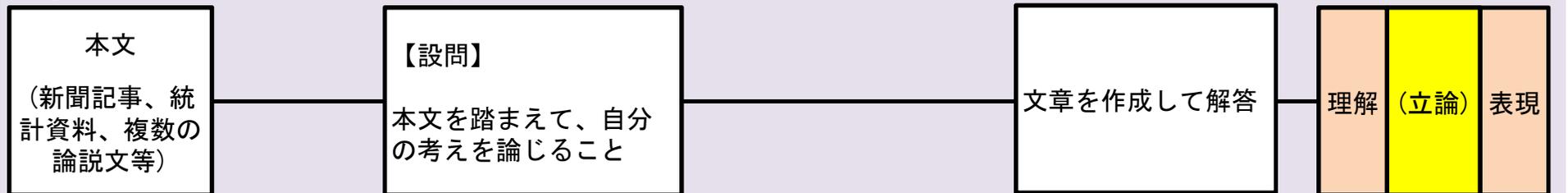
●記述式：傍線部が意味する内容(筆者の考えなど)を説明する問題 [現在の個別選抜で多く出題されているもの]



●新しいタイプの記述式：本文の内容を基に考えを文章化する問題 [大学入学希望者学力評価テスト(仮称)で出題を目指す問題]



●解答の自由度の高い記述式(小論文など) [今後の個別選抜でさらなる出題が望まれる問題]



言語能力を構成する資質・能力が働く過程のイメージ

認識から思考へ

構造と内容の把握

精査・解釈

考えの形成

テキスト（情報）の理解

- <知識・技能>
- 言葉の働きや役割に関する理解
 - 日本語や外国語の特徴やきまりに関する理解と使い分け
 - ・音声、話し言葉
 - ・文字、書き言葉
 - ・言語の位相(地域や世代、相手や場面等)による言葉の違いや変容)
 - ・語、語句、語彙
 - ・文の成分、文の構成
 - ・文章の構造(文と文の関係、段落、段落と文章の関係)
 - 言葉の使い方に関する理解と使い分け
 - ・話し方、書き方、表現の工夫
 - ・聞き方、読み方
 - 言語文化に関する理解
 - 既有知識(教科に関する知識、一般常識、社会的規範等)に関する理解

- <思考力・判断力・表現力等>
- 【創造的・論理的思考の側面】
- 情報を多面的・多角的に精査し構造化する力
 - ・推論及び既有知識による内容の補足、精緻化
 - ・論理(情報と情報の関係性：共通-相違、原因-結果、具体-抽象等)の吟味・構築
 - ・妥当性、信頼性等の吟味
 - 構成・表現形式を評価する力
- 【感性・情緒の側面】
- 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力
 - 構成・表現形式を評価する力
- 【他者とのコミュニケーションの側面】
- 言葉を通じて伝え合う力
 - ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
 - ・自分の意思や主張の伝達
 - ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り
 - 構成・表現形式を評価する力

- <思考力・判断力・表現力等>
- 考えを形成し深める力
 - ・情報を編集・操作する力
 - ・新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力
 - ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力

表現

構成・表現形式の検討

テーマ・内容の検討

考えの形成・深化

推敲

- 文章の推敲
 - ・構成・表現形式の修正
 - ・内容の再検討、考えの再整理
- 発話の調整
 - ・自分の思いや考えを伝えるための展開
 - ・相手の立場や視点を考慮した展開

思考から表現へ

文章や発話による表現

<学びに向かう力・人間性等>

- 言葉を通して、
- ・社会や文化を創造しようとする態度
 - ・自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度、集団としての考えを発展・深化させようとする態度
 - ・心を豊かにしようとする態度

- ・自己や他者を尊重しようとする態度
- ・自分の感情をコントロールして学びに向かう態度
- ・言語文化の担い手としての自覚

1. 記述式の導入趣旨

○ 大学入学者選抜においては、現行の高等学校学習指導要領において、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・表現力等を育むため、言語活動(例:説明、論述、討論等)を重視していることを考慮する必要。

○ このことは、初年次教育の効果的な実施など大学教育改革にも寄与。

<共通テスト>

○ 左記の趣旨を実現するためには、各大学が個別試験で学習指導要領の内容を踏まえた記述式試験を全受験生に実施することが望ましいが、国立大学の個別試験でも記述式が約4割にとどまっている現状を踏まえ、各大学の負担をより少なくし、幅広く利用できるようにするため、共通テストでの出題を検討しているところ。

<個別選抜>

○ 各大学の個別選抜においては、共通テストの積極的な活用を図るとともに、現行の高等学校学習指導要領を踏まえ、作問の改善や小論文等の導入を図ることが重要。

2. 共通テストの記述式について

○ 上記1.の趣旨を実現するためには、大学の負担・体制や私立大学の入試日程、個別選抜との関係等も考慮しつつ、多くの大学が共通テストの記述式を活用できる仕組みが必要。

センターが採点結果を提供し、各大学で活用

○ センターが採点結果を提供し、マークシート式問題と併せて各大学で活用。

○ 共通テストの記述式の活用を促進

※ 各大学の個別選抜において、アドミッション・ポリシーに基づき、論理的思考力・判断力・表現力等を適切に評価するため、大学の作問の負担を考慮しつつ、より質の高い問題を提供する必要。

センターが問題提供、各大学の個別試験で活用

○ センターが作問し、一定の期日に各大学が個別選抜の一部として実施・採点できるよう、大学の求めに応じて問題や採点基準を提供。

○ 個別選抜の記述式の活用を促進

※平成32年度以降、作題や採点の知見の積み重ねにより、作題の工夫、採点精度、識別力の一層の向上を図る。

※平成36年度以降は、平成32年度からの実施状況やC B T等の技術開発の状況等を踏まえつつ、更なる改善を図る。

記述式問題の実施【国語】イメージ(案)

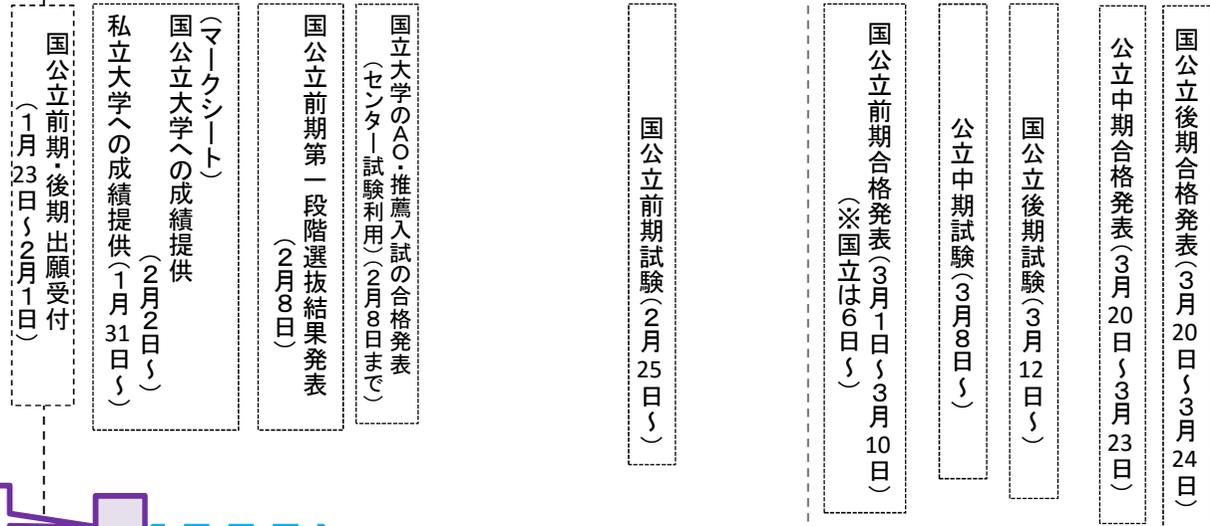
1月	2月	3月
----	----	----

AO入試・推薦入試

個別学力検査(実施:2月1日~)

1/16、17

新テスト実施(記述式問題含む)



■センターが採点結果を提供し、各大学で活用
:20日程度

※例: 80~120字程度の問題を含め数問を想定

※平成32年度以降、作題や採点上の知見の積み重ねにより、作題の工夫、採点精度、識別力の一層の向上を図る。

マークシート式問題と記述式問題の大問は分けて出題、

結果提供

国公立



※日程等は、平成29年度試験を基に作成

問題提供

■センターが問題提供、各大学の個別試験で活用

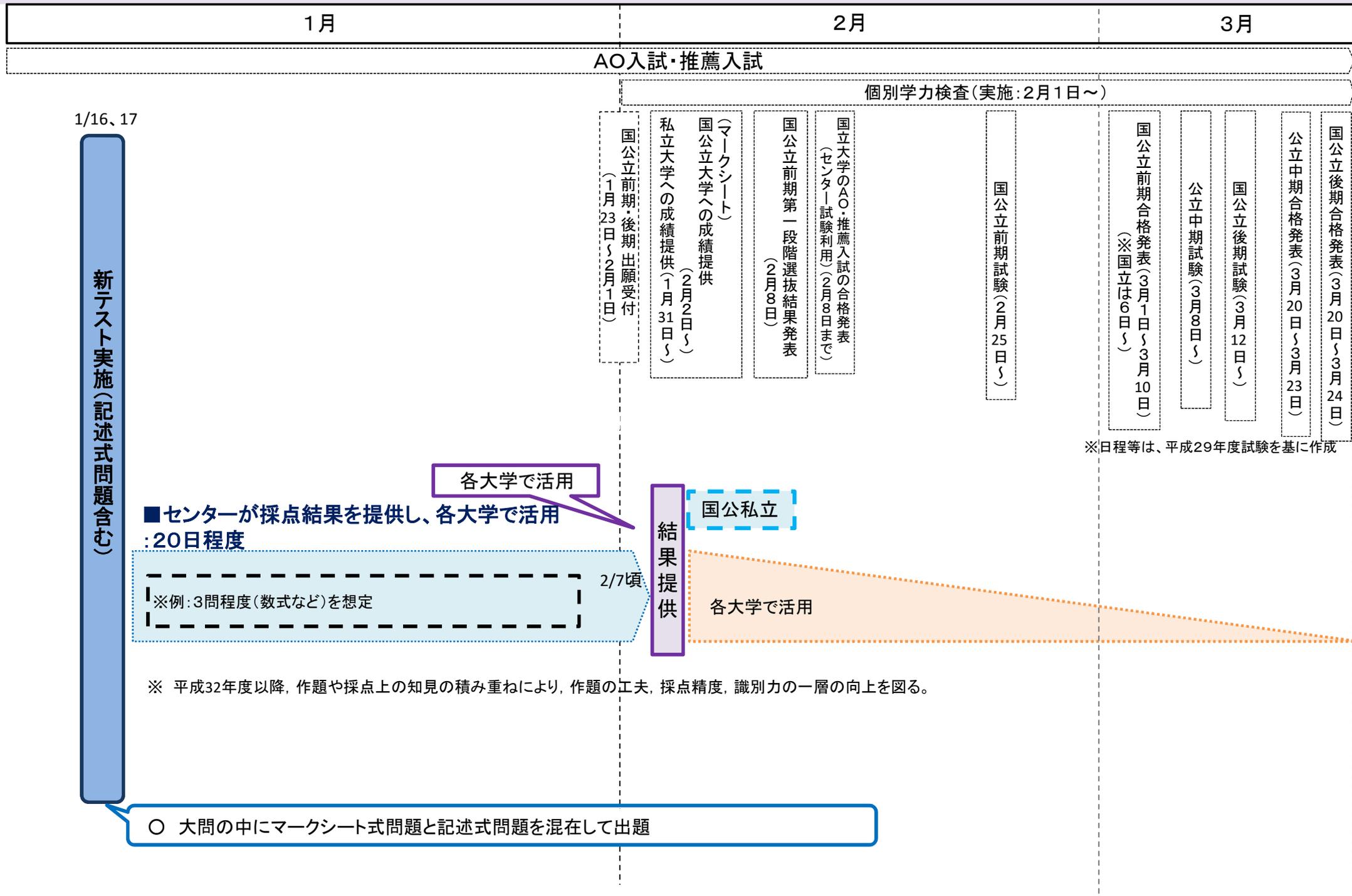
・大学の求めに応じて問題・採点基準を提供し、一定の期日に各大学が個別選抜の一部として実施・採点
※200~300字程度を想定

各大学の判断で個別試験問題として活用

試験実施



記述式問題の実施【数学】イメージ(案)



「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の記述式【国語】の実施イメージ(案)②

内容面

○センターが採点結果を提供し、各大学で活用

○本文の内容を基に考えを文章化する問題(基盤的な能力を測る問題)

○多様な文章や図表などをもとに、複数の情報を統合し、構造化して新しい考えをまとめるための思考力・判断力や、その過程や結果について、相手が的確に理解できるよう、論拠に基づいて表現する力を評価
 ※特に、「論理(情報と情報の関係性)の吟味・構築」や「情報を編集・操作する力」の評価を重視
 (例)・テキスト全体の論旨を把握し、目的に応じて必要な情報を付加、統合して比較したり関連づけたりして論じる。
 ・複数のテキストの妥当性を吟味し、情報を統合・構造化して論ずる。

○論理的な内容を題材にした説明、論説等
 ○新聞記事・社説、会議等の記録、実務的な文章(取扱説明書、報告書、提案書等)、公文書、契約書や法律の条文等
 ○統計資料(図表・グラフ)

○解答に当たって使用すべき用語・表現の一部を指定。
 例: 名詞、主語・述語、文末表現、類語
 ○対話文・説明文の一部分を抜き書きで解答させる。
 例: 「文章の口に入る適切な内容を書きなさい。」
 ○設問の中で情報間の関係性を提示して解答させる。
 例: 「原因」又は「結果」に当たる部分を記述させる。
 「Aについて、Bと比較して考えを述べなさい。」

○国語の専門家以外の者(例: 民間事業者)も採点可能な内容

○中難易度

○80字から120字程度の問題を含め数問を想定

※平成32年度以降、作題や採点の知見の積み重ねにより、作題の工夫、採点精度、識別力の一層の向上を図る。
 ※平成36年度以降は、平成32年度からの実施状況やCBT等の技術開発の状況等を踏まえつつ、更なる改善を図る。

※併せて、センターが作問し、一定の期日に各大学が個別選抜の一部として実施・採点できるよう、大学の求めに応じて問題や採点基準を提供する。
 (より深く能力を問う問題として、200~300字程度を想定)

「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の記述式【国語】の実施イメージ(案)③

		○センターが採点結果を提供し、各大学で活用
54 実施 方法 面	6. 出題方法	出題科目「国語」の中で、マークシート式問題と記述式問題の大問は分けて出題することを想定。
	7. 試験時間	現行80分の試験時間はマークシート式と併せて100分程度を想定。
	8. 実施時期	1月中旬の2日間とする。 ※受験生側の状況や、年末年始の輸送、大学でのテスト問題の保管体制等を踏まえながら検討
	9. センターの処理期間等	20日程度(民間事業者を活用)
	10. センターからの提供データ	○センターの採点基準 ○採点結果データ
	11. 提供開始時期	現行の「私立1月31日」「国公立2月2日」の設定(平成29年度入試の場合)について、プレテスト等を踏まえ、1週間程度後ろ倒しする方向で検討。 ※マークシート式の結果については現行通り

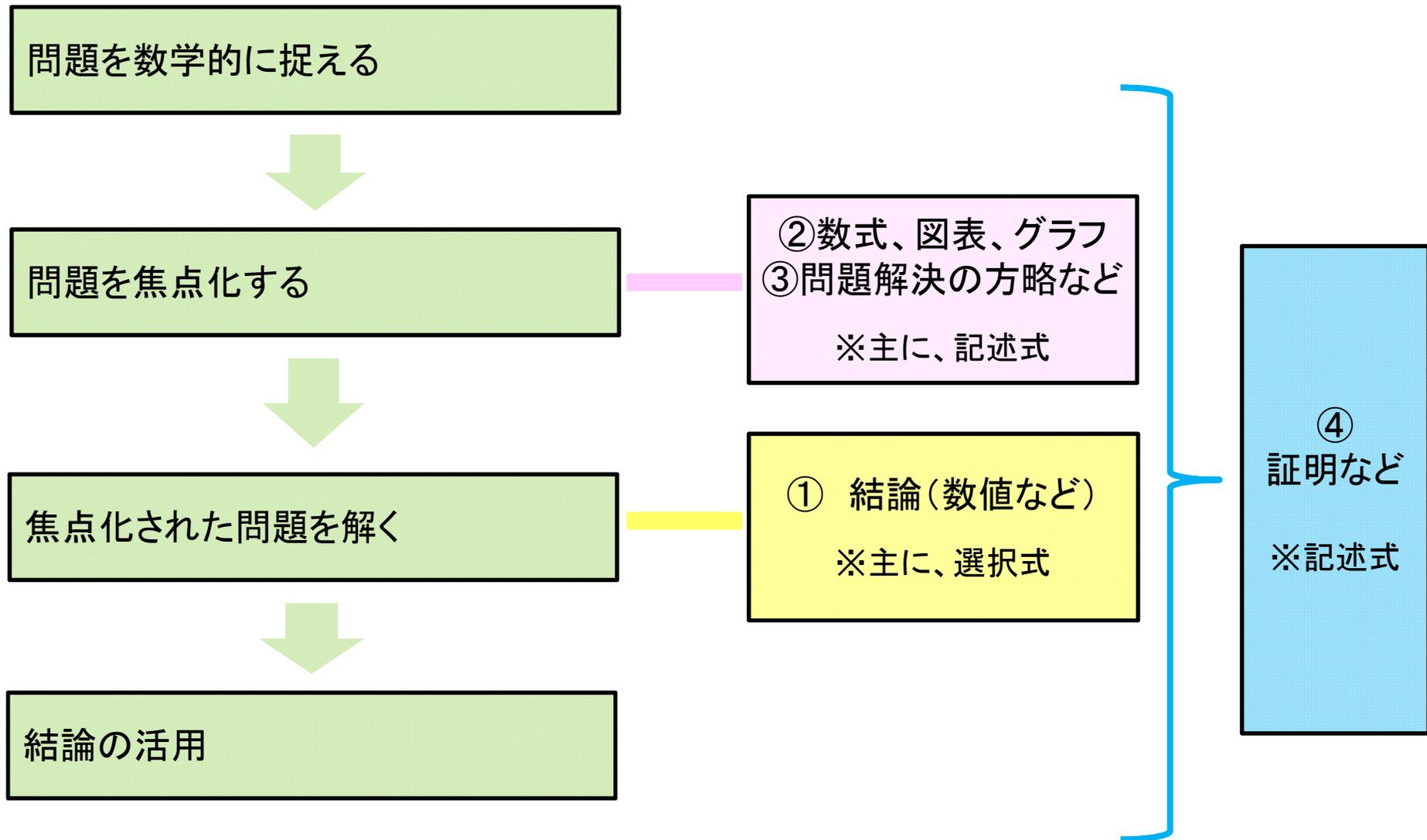
【数学】解答させる内容（問題の例）と資質・能力、出題形式との関係について（素案）

学習指導要領の見直しの内容等も踏まえ、下記について更に整理する。

	知識・技能の利用	焦点化した問題を解決すること ○目的に応じて数・式、図、表、グラフなどを活用し、一定の手順にしたがって数学的に処理する力 ○数学的な見方・考え方を基に、的確かつ能率的に処理する力 ○論理的に推論する力（帰納、類推、演繹）	数学を活用した問題解決に向けて、構想・見通しを立てること ○数学的な問題の本質を見いだす力（洞察力） ○数学的な問題を解決するための見通しを立てる力（構想力）	解決過程を振り返り、得られた結果を意味づけたり、活用したりすること ○得られた結果を元の事象に戻してその意味を考える力 ○様々な事象に活用する力 解決過程を振り返るなどして概念を形成したり、体系化したりすること ○得られた結果を基に批判的に検討し、体系的に組み立てていく力 ○見いだした事柄を既習の知識と結びつけ、概念を広げたり深めたりする力 ○統合的・発展的に考える力
①焦点化された問題を解く ※数学における基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を用いて与えられた問題を解決すること ①選択式・短答式	簡単な無理数の四則計算（無理数の加法、減法、乗法公式などを利用した乗法、分母が二項程度までの分数の分母の有理化） ある命題が、他の命題の必要条件、十分条件、必要十分条件のいずれかであるか判断する。			
	分配法則、たすき掛けを用いて、式を展開したり因数分解したりする。 正弦定理、余弦定理や三平方の定理等を用いて、 $\sin \theta$ 、 $\cos \theta$ 、 $\tan \theta$ の数値を求める。			
	ある資料の、平均値、中央値、最頻値、分散、標準偏差等の数値を求める			
②問題を焦点化する（数式、図表、グラフ など） ※数学における基本的な概念や原理・法則を理解を基に、問題場面に活用して問題を解くこと ②選択式・条件付記述式		文字や数字で示された集合について、共通部分、和集合などを、場合分けして考えて解く。		
		おきかえや、交代式の性質などを用いたりして、式の展開や因数分解を能率的に行う。		
		絶対値を用いた一次不等式について、絶対値の性質やグラフなどを用いて場合分けして解く。		
		二次関数の式やグラフ等を用いて、関数の値のとり得る範囲を求める。	第1問1(ii)	
		やや複雑な二次関数の最大値や最小値を条件に応じて場合分けをして求める。		
		絶対値の付いた二次関数について、場合分けしてグラフをかいたり、グラフを基に条件に適する数値の範囲を求める。		
③問題を焦点化する（問題解決の方略 など） ※問題場面で成り立つことが予測される数学的な事柄・事実や、問題解決に向けた構想を立てるなど問題解決の方略を表現すること ③選択式・条件付記述式		やや複雑な方程式をおきかえを利用したりして簡単な方程式に変形し解を求める。		
		三角比や正弦定理、余弦定理を用いて条件に適する図形やその特徴などを答える。	第1問[2](4)	
		ある命題の真偽を調べる方法を求める。	ある命題の真偽を調べる方法を求める。	第2問[1](2)(ii)
④問題解決のプロセス全体を表現する ※証明など、数学的な問題解決のプロセスを表現すること ④自由記述式・証明		事象を特定の図形に着目して考察し、その結果を基に、問題解決の方法を数学的に説明する方法を求める。	事象を特定の図形に着目して考察し、その結果を基に、問題解決の方法を数学的に説明する方法を求める。	第2問[1](2)(i)
		ある統計資料について、ヒストグラム、箱ひげ図、平均、分散や標準偏差などを用いて傾向を見いだし予測される数学的な事柄について記述する。	ある統計資料について、ヒストグラム、箱ひげ図、平均、分散や標準偏差などを用いて傾向を見いだし予測される数学的な事柄について記述する。	
	ある命題を背理法で証明する。	ある命題を背理法で証明する。	ある命題を背理法で証明する。	ある命題を背理法で証明する。
	平面図形や空間図形について三角比の考え方をを用いて、計量したり証明したりする。	平面図形や空間図形について三角比の考え方をを用いて、計量したり証明したりする。	平面図形や空間図形について三角比の考え方をを用いて、計量したり証明したりする。	平面図形や空間図形について三角比の考え方をを用いて、計量したり証明したりする。
	二次関数や二次不等式の特徴を踏まえて条件に適する数値を求めたり、証明したりする。	二次関数や二次不等式の特徴を踏まえて条件に適する数値を求めたり、証明したりする。	二次関数や二次不等式の特徴を踏まえて条件に適する数値を求めたり、証明したりする。	二次関数や二次不等式の特徴を踏まえて条件に適する数値を求めたり、証明したりする。

※解答させる内容と資質・能力、出題形式との関係は、代表的な例を挙げているものであり、問い方や場面等によっては別の出題形式等で問う可能性もあり得る。

数学における思考のプロセス等と解答形式との関係のイメージ



算数・数学の学習過程のイメージ

算数・数学における問題発見・解決の過程と育成を目指す資質・能力

事象を数理的に捉え、数学の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決することができる。

日常生活や社会の事象を数理的に捉え、
数学的に処理し、問題を解決することができる。

数学の事象について統合的・発展的に考え、
問題を解決することができる。

- A1 日常生活や社会の問題を数理的に捉えることについて
- 事象の数量等に着目して数学的な問題を見いだす力
 - 事象の特徴を捉えて数学的な表現を用いて表現する力(事象を数学化する力)

数学的に表現した問題

- A2 数学の事象における問題を数理的に捉えることについて
- 数学の事象から問題を見いだす力
 - 事象の特徴を捉え、数学化する力
 - 得られた結果を基に拡張・一般化する力

- B 数学を活用した問題解決に向けて、構想・見通しを立てることについて
- 数学的な問題の本質を見いだす力(洞察力)
 - 数学的な問題を解決するための見通しを立てる力(構想力)

数学の事象

日常生活や
社会の事象

焦点化した問題

- D1 解決過程を振り返り、得られた結果を意味づけたり、活用したりすることについて
- 得られた結果を元の事象に戻してその意味を考える力
 - 様々な事象に活用する力

- D2 解決過程を振り返るなどして概念を形成したり、体系化したりすることについて
- 数学的な見方・考え方のよさを見いだす力
 - 得られた結果を基に批判的に検討し、体系的に組み立てていく力
 - 見いだした事柄を既習の知識と結びつけ、概念を広げたり深めたりする力
 - 統合的・発展的に考える力

- C 焦点化した問題を解決することについて
- 目的に応じて数・式、図、表、グラフなどを活用し、一定の手順にしたがって数学的に処理する力
 - 数学的な見方・考え方を基に、的確かつ能率的に処理する力
 - 論理的に推論する力(帰納、類推、演繹)

結果

※これらの力は必ずしもこの位置のみに位置づくわけではない

- E 数学的な表現を用いて、人々と交流し合うことについて
- 数学的な表現を用いた説明を理解したり評価したりする力
 - 目的に応じて、自分の考えなどを数学的な表現を用いて説明する力

- F 学習に向かう力、態度について
- 過程や結果を吟味し、評価・改善する態度
 - 多面的に考え、粘り強く問題の発見や解決に取り組む態度

思考・判断

表現

人間性

大学入学者選抜における英語 4 技能の評価について（案）

1. 基本的な方向

- 平成 3 2 年度に実施する大学入学者選抜から、各大学は、受検生に英語の試験を課す場合、4 技能を総合的に評価する。
- 英語 4 技能評価を推進するため、共通テストの枠組みにおいて、センターが認定した資格・検定試験が活用される方向を目指す。
- 共通テストにおける英語科目は、平成 3 2 年度以降も当面実施するが、認定試験の活用状況等を見つつ、すみやかに、全受検生を対象とする実施はとりやめる（認定試験では対応できない受検者に対するセーフティーネットとして、必要な範囲で実施する）。

2. 主要な論点

- ① 学習指導要領との整合性
 - ・「認定」を通じて、資格・検定試験と現行学習指導要領の対応関係を確認する。
 - ・併せて、教育振興基本計画や次期学習指導要領における英語力の目標等を踏まえ、各資格・検定試験で測定可能な英語力の水準について確認する（CEFR の A 2 及び B 1 の能力測定）。
- ② 成績表示、識別力
 - ・成績表示は CEFR に対応した段階別表示とする。
 - ・センター試験と同程度の識別力を担保するため、段階の細分化について研究を進める。
- ③ 試験相互の比較可能性
 - ・CEFR の各バンドとの対応関係を介して、認定試験相互の比較が可能。
 - ・各認定試験実施団体に、CEFR との対応状況について根拠を示すよう求めるとともに、国（センター）としても検証を実施する。
- ④ 場所・体制・受検料・受検回数などの公平性・信頼性の担保
 - ・場所・体制（採点、試験監督等）・受検料については、「認定」を通じて、公平性・信頼性を担保する（継続的なアセスメントを実施）。
 - ・経済的格差や離島・僻地等の居住地による機会の不平等、受検者の負担、高等学校教育への影響（「受検の早期化」）を考慮し、受検期間・回数に制限を設ける（高校三年生の 4 月～1 2 月、2 回まで）

英語の資格・検定試験の活用について（たたき台）

【英語 4 技能評価の考え方】

<英語教育の抜本的改革>

- グローバル化が急速に進展する中、英語によるコミュニケーション能力の向上が課題となっており、現行の高等学校学習指導要領（平成25年度～）では、授業は英語を用いて行うことを基本とし、英語4技能（※1）を総合的に育成することが求められている。

また、次期学習指導要領では、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、外国語の能力を総合的に評価するCEFR（※2）等を参考に、段階的な「国の指標形式の目標」を設定するとともに、統合的な言語活動を一層重視。

※1 英語4技能…「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」

※2 CEFR… (Common European Framework of Reference for Languages : Learning , teaching , assessment) の略称。外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠。

- 大学入学者選抜においては、このような高等学校段階の「話すこと」「書くこと」を含む総合的な能力を適切に評価できるようにすることが必要。このことは、グローバル人材育成の取組など、大学教育改革にも寄与。

<資格・検定試験の活用の必要性>

- 本来的には、各大学が個別選抜において「話すこと」「書くこと」を含む英語4技能評価を全受検生に実施することが望ましいが、ノウハウや作問・採点者、採点期間・コストなど、体制・負担の観点から課題が大きい。

- 大学入試センター試験では、従来、コミュニケーション能力を重視した出題範囲の設定（平成9年度～）や、リスニングの導入（平成18年度～）等に取り組んできたが、大枠では「読むこと」「聞くこと」の能力を中心に選択式で問うものとなっており、試験開始以来、大きな変化はない。

また、「話すこと」「書くこと」について、50万人規模での一斉実施のための環境整備等の観点から、現行のセンター試験のように、大規模、同日一斉試験は困難。

このため、「話すこと」「書くこと」を含む統合型の言語活動など、英語教育の抜本的改革に対応するには限界がある。

- 一方、民間の資格・検定試験は、英語4技能を総合的に評価するものとして社会的に認知され、定着している。高校教育や大学の初年次教育の場でも活用が進み、推薦・AO入試を中心に大学入学者選抜にも活用されている。

(参考)・高校3年生の12月時点で英検を受検したことがある生徒数

普通科生徒71万人中23万人(約3割)(H27英語教育実施状況調査より)

・大学入学者選抜において英語資格・検定試験を活用している大学(H27年度)

国立大学では、推薦入試23.5%、AO入試13.6%、一般入試11.1%

- 本件に関連して、「英語力評価及び入学者選抜における資格・検定試験の活用促進について(通知)」(平成27年3月31日文部科学省初等中等教育局長・高等教育局長通知)においても、高等学校や大学等における資格・検定試験の活用を奨励しているところである。
- さらに、高大接続システム改革会議の最終報告でも、「民間の資格・検定試験の知見の積極的な活用の在り方なども含め検討する」とされている。
- これらを踏まえ、こうした状況の中、大学入学者選抜において、資格・検定試験を積極的に活用することにより、「話すこと」「書くこと」を含む英語4技能評価を推進することが有効。このことにより、高等学校における授業改善を促進。

【英語4技能評価の活用】

＜大学における活用の在り方＞

- 大学入学者選抜において、英語4技能評価を推進するため、センターが認定した資格・検定試験(以下「認定試験」という。)が活用されることを目指す。
- この認定試験の活用にあたっては、一般入試を含め、入学者選抜の要素として広く活用することについて大学・高校関係者に認められるよう、学習指導要領との整合性、大学入学者選抜としての識別力、試験相互の比較可能性、場所・体制・受験料・受験回数等の公平性を確保することが必要。
このため、認定試験による4技能評価の円滑な導入・定着、制度変更に伴う受検生・高校・大学への影響にも配慮して、平成32年度からは以下のとおり対応【別紙1】。
 - ① 認定試験の4技能評価(段階別表示)の活用
 - ② センターが2技能評価を実施<リーディング、リスニング>

※ 平成32年度に実施する入学者選抜から、各大学は、受検生に英語の試験を課す場合、4技能を総合的に評価する。

英語4技能の評価は、認定試験又は各大学が個別に自ら実施する試験による。

共通テストにおける英語科目は、平成32年度以降も当面実施するが、認定試験の活用状況等を見つつ、すみやかに、全受検生を対象とする実施はとりやめる(認定試験では対応できない受検生に対するセーフティネットとして必要な範囲で実施する)。

- この場合、各大学の個別選抜においては、認定試験の段階別表示の結果について、例えば、
 - ・ 出願資格
 - ・ 試験免除
 - ・ 得点加算
 - ・ 総合判定の一要素などの方法で活用することが考えられ、従来センター試験を活用してきた大学に対しては、活用事例を複数例示するなど活用を促していく【別紙2】。

＜活用を推進するための方策＞

- このような4技能評価を推進していくための仕組みとして、センターが認定試験の結果を一元管理し、これまで個々に行われていた成績提供・受領の中核として機能することにより、
 - ① 一括した提供・受領による大学、受検生、試験団体の各手続きの簡素化とセキュリティリスクの軽減
 - ② 成績受領フォーマットの統一による大学における成績集計の事務コストの削減
 - ③ データ蓄積による改善、様々な検証などを可能とし、国公立大学における4技能評価を促進する環境を構築する【別紙3】。
- あわせて、高等学校教育への影響や大学入学者選抜としての質の確保の観点から、センターが資格・検定試験を認定する形で関与することにより、CEFRに対応した段階別表示とともに、学習指導要領との整合性、信頼性・妥当性、受検料負担の抑制などの水準を担保。
 - ※センター試験と同程度の識別力を担保するため、CEFRの段階の細分化（例：CEFR-J）について研究を進める。
- 大学関係団体において、4技能評価に関する一定の合意形成などを図るよう調整（認定試験、共通テスト、個別選抜を通じた4技能評価の推進、認定試験の活用方法など）。
- センター未利用大学についても、個別選抜やAO・推薦入試における活用等、認定試験の活用のニーズに対応することを検討。

＜学習指導要領との整合性＞

- 次期学習指導要領においては、
 - ・ 小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、国際的な基準であるCEFRなどを参考に、段階的に実現する指標形式の目標（CAN-DO形式の目標）を設定すること、
 - ・ 高等学校卒業段階で求められる力として、必修科目でCEFRの「A2」相当、選択科目で同「B1」相当を想定していること、が中教審答申で示されている。

- この指標形式の目標については、現行学習指導要領の下での英語教育の取組を評価する上でも活用可能なものであり、現行の大学入試センター試験において、必履修科目（「コミュニケーション英語I」）及び選択必履修科目（「コミュニケーション英語II」及び「英語表現I」）が出題範囲となっていることも踏まえ、認定を受けようとする資格・検定試験について、CEFRの「A2」相当及び「B1」相当の能力を測定することが可能であることを求める。【別紙4】。
- 一方、各資格・検定試験とCEFRとの関係については、既に、各資格・検定団体による検証結果をもとに、資格・検定試験とCEFRの段階別表示との対照表が作成されており、その対照関係を示す客観的な検証方法・結果を公表することを求める。
- 上記のほか、現行学習指導要領下における資格・検定試験の認定に当たっては、「コミュニケーション英語I」「コミュニケーション英語II」及び「英語表現I」の学習を通じて得られる力を測定することが可能なものかについて、言語活動、言語の使用場面、言語材料等の面も総合的に評価する。
 ※これらに加え、例えば、国際的に認知されているとともに、日本の大学における入学者選抜や留学で活用されている実績を有することも、認定の要素とすることも考えられる。
- これらを踏まえ、高等学校学習指導要領と各資格・検定試験とが整合していることを確認する。

<評価面>

- 採点の質
 - ・ 各認定試験団体に、採点の質の確保に関する客観的な検証を行い、そのプロセスに関する情報を記録・公開していることを求める。
あわせて、信頼性向上に対する改善努力を定期的に公表することを求める。
- 異なる資格・検定試験の結果の比較
 - ・ 各認定試験団体に、試験問題、評価の観点、採点基準等がCEFRと対照していることを示す客観的な検証方法・結果を公表することを求める【別紙5】。
 ※CEFRと各資格・検定試験との対照表の向上のための検証を実施。

<実施方法面>

- 時期・回数制限
 - ・ 実施時期・回数（試験団体）：毎年4月～12月の間、複数回実施可能であること【別紙6】
 - ・ 受検時期・回数（受検生）：受検時期は、高校3年生以降の毎年4月～12月とし、受検可能回数は2回とする（良い方の結果を用いる方式とする）【別紙7】

※経済的格差や離島・僻地等の居住地による機会の不平等、受検生の負担、高等学校教育への影響（例：早期から認定試験対策に追われるとの懸念）の一方、受検機会の複数化の観点も考慮し、一定の回数制限を設けることが適当。

○ 実施場所・体制の確保

- ・ 認定試験のいずれかにおいて、センター試験と同等以上の実施場所を確保できるよう、試験団体と調整。

※現在でも、複数の試験団体が対応可能【別紙8】

※離島・僻地への配慮の観点からは、認定試験を活用する場合は全ての試験を対象とする必要。

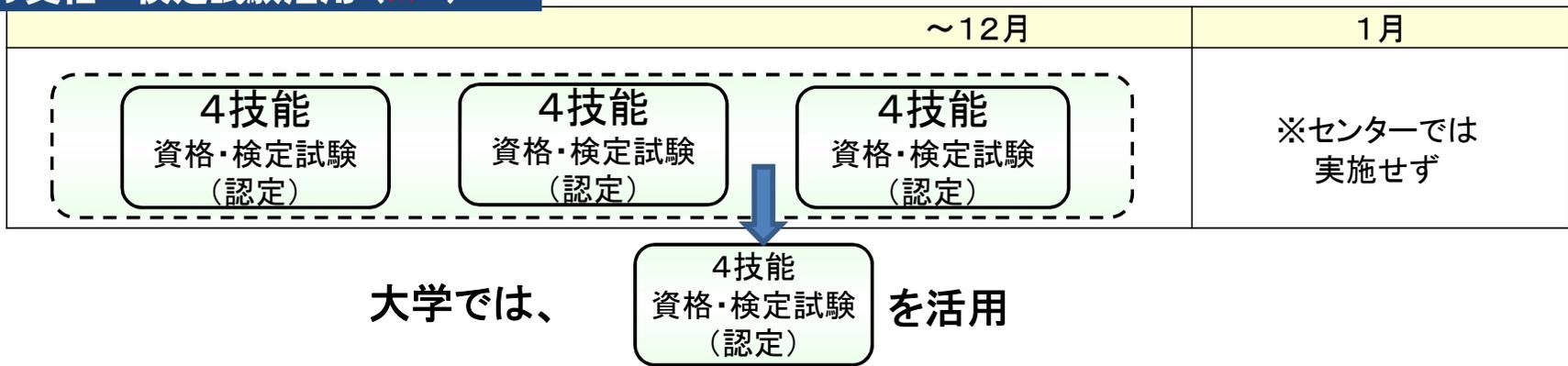
- ・ 採点者、試験監督者等必要となる人員の質・量を確保することを求める。
- ・ 会場ごとに、認定試験団体が一定の資格を有する試験監督者等を派遣。なお、研修の実施や誓約書の提出により、高校教員にも協力を求める。
- ・ 各認定試験団体に、障害のある受検生の配慮として、認定試験の実施に当たっては、合理的配慮の方法として適切な手段を提供することを求める。
- ・ 資格・検定試験については、主に各試験団体において検定試験に対する自己評価がされている。また、現在、第三者評価機関による第三者評価の在り方について検討されている。これらの効果的な活用の在り方も検討。

○ 検定料

- ・ 低所得者世帯の受検生等の検定料の割引や複数回受検時の減免等の配慮を求める。（例：現行の割引等の額以下など）

※現在、複数の試験団体が5,000円程度で実施【別紙9】

4技能の資格・検定試験活用（※1）



当面英語4技能の資格・検定試験活用と2技能のセンター実施

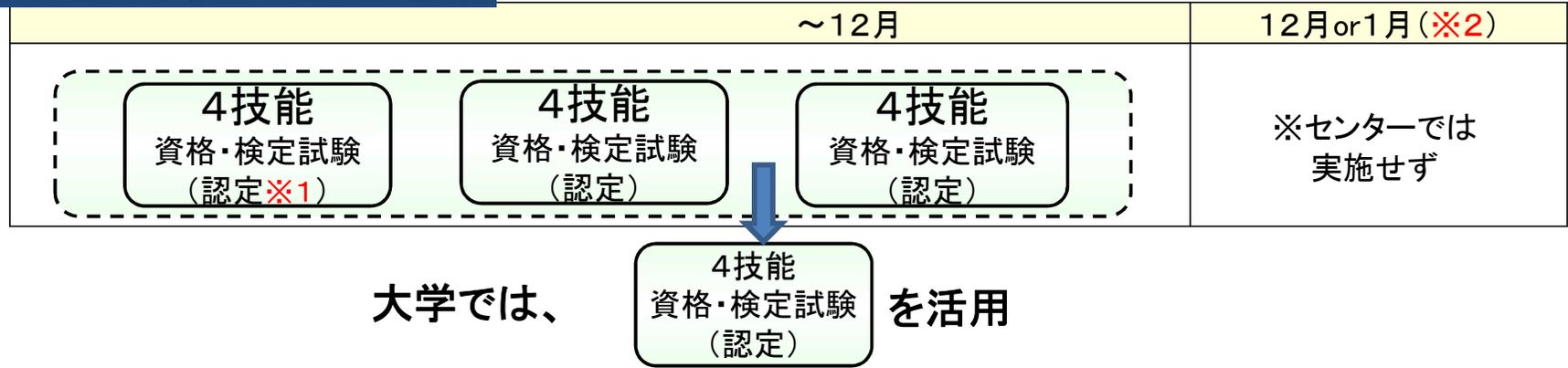


※1 平成36年度からの認定試験の活用のみによる英語4技能評価の実現を目指す。
 ※2 大学においては、いずれか(又はその組み合わせ)の活用方式を選択し公表(選抜実施要項に明記)。

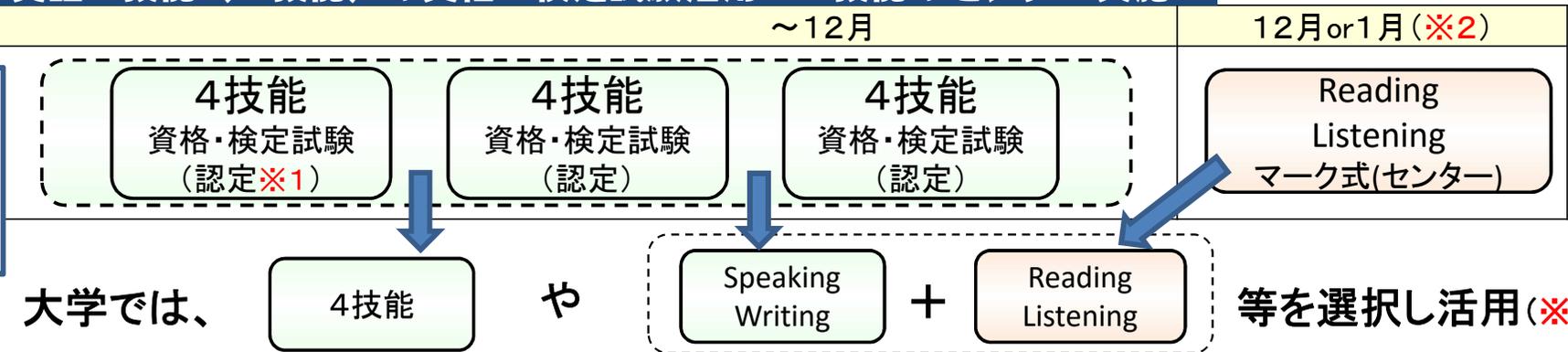
◎8月に示した案

- ・ 資格・検定試験の活用のみによる英語4技能評価を目指す。
(一定の基準を満たすものとして、国(センター)が認定)
- ・ 当面は、センターでも英語共通テスト(読む、聞く)を実施し、民間の資格検定試験の結果と組合せて、評価する。

【案1】4技能の資格・検定試験活用



【案2】英語4技能（2技能）の資格・検定試験活用+2技能のセンター実施



4技能の民間活用【案1】
を見据えながら、当面
センターにおいても試験
を実施する案

※1 認定基準に応じて、①既存の資格・検定試験のカスタマイズ、②新規の資格・検定試験の導入もありうる。
 ※2 センターが実施する時期については、12月と1月の双方が考えられる。
 ※3 大学においては、いずれか（又はその組み合わせ）の活用方式を選択し公表（選抜実施要項に明記）。

- 平成32年度から資格・検定試験（認定試験）、共通テスト、個別試験を通じて、できる限り4技能の評価を行う。
- 認定試験は、CEFRを参考に段階別評価を基本とする。
- 大学において認定試験を活用する場合、以下の方法が考えられる。

活用方法	定義	活用方法イメージ例
①出願要件	<p>■認定試験の結果において、大学が設定した一定段階を超えた場合に、受験資格を付与。</p>	<p>・CEFRに対応したA2を出願要件とする。</p>
②試験免除 (免除されたセンター、個別試験は受験不要)	<p>■認定試験の結果において、大学が設定した一定段階を超えた場合に、個別試験における英語の受験は免除。</p>	<p>・CEFRに対応したB2以上を所有している場合、英語学力試験を満点扱いとし試験の受験を免除</p>
③得点加算	<p>■認定試験の結果を得点に換算した上で、個別選抜やセンター試験における英語の得点に一定の得点を加算。</p>	<p>・CEFRに対応したC2・・・○点 ・ " C1・・・○点 ・ " B2・・・○点 ・ " B1・・・○点 ・ " A2・・・○点 ・ " A1・・・○点</p>
④総合判定の一要素	<p>■認定試験の結果を筆記試験、面接、調査書等の評価の一つとして考慮。</p>	<p>・CEFRに対応した段階について、総合評価に反映</p>

大学入学者選抜における民間の英語資格・検定試験の活用事例

①出願要件

■ ○○大学(一般)

資格・検定試験(試験名とスコア)

下記のスコアを取得していることが出願の要件

TOEFL iBT 40

TOEFL PBT 435

TOEFL Junior Comprehensive 310

TOEIC L&R,S&W 400

英検 準2級

IELTS 3.5

TEAP 160

GTEC CBT 720

GTEC for STUDENTS 500

センター試験

外国語 250点満点

* 他に国語、地歴・公民、数学、理科
計350点満点

個別試験

外国語 ー

* 数学、理科
計300点満点



平成32年度以降の活用事例(案)

活用案

下記の段階を取得していることが出願の要件

認定試験のCEFRとの対応 A2

大学入学希望者学力評価テスト (仮称)

外国語 250点

* 他に国語、地歴・公民、数学、理科
計350点満点

個別試験

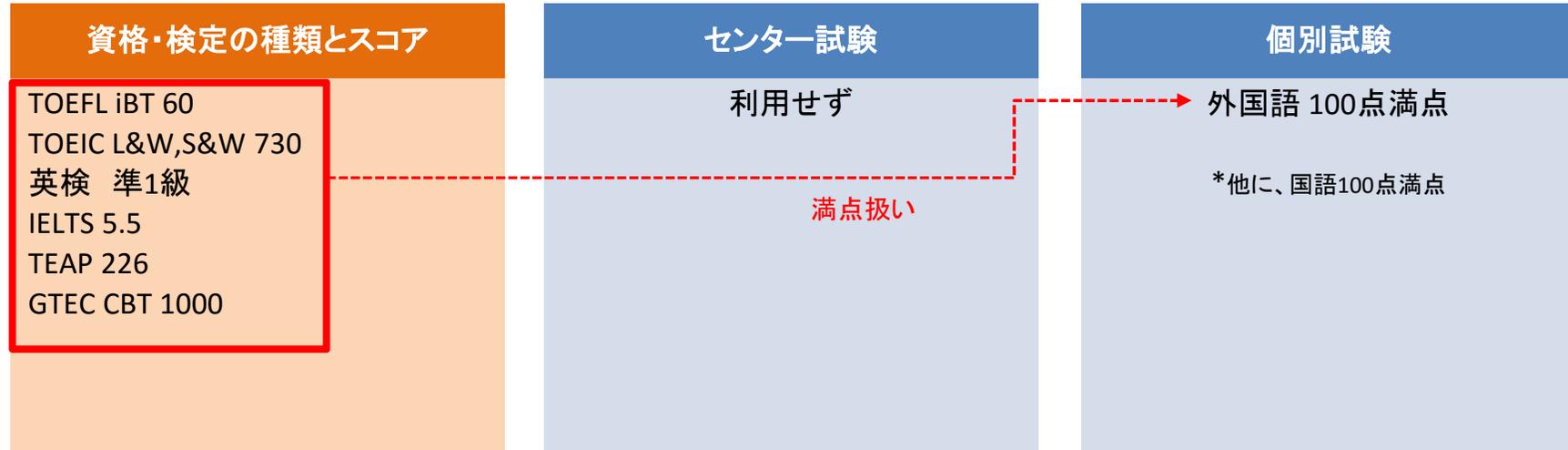
外国語 ー

* 数学、理科
計300点満点

大学入学者選抜における民間の英語資格・検定試験の活用事例

②試験免除(個別試験の場合)

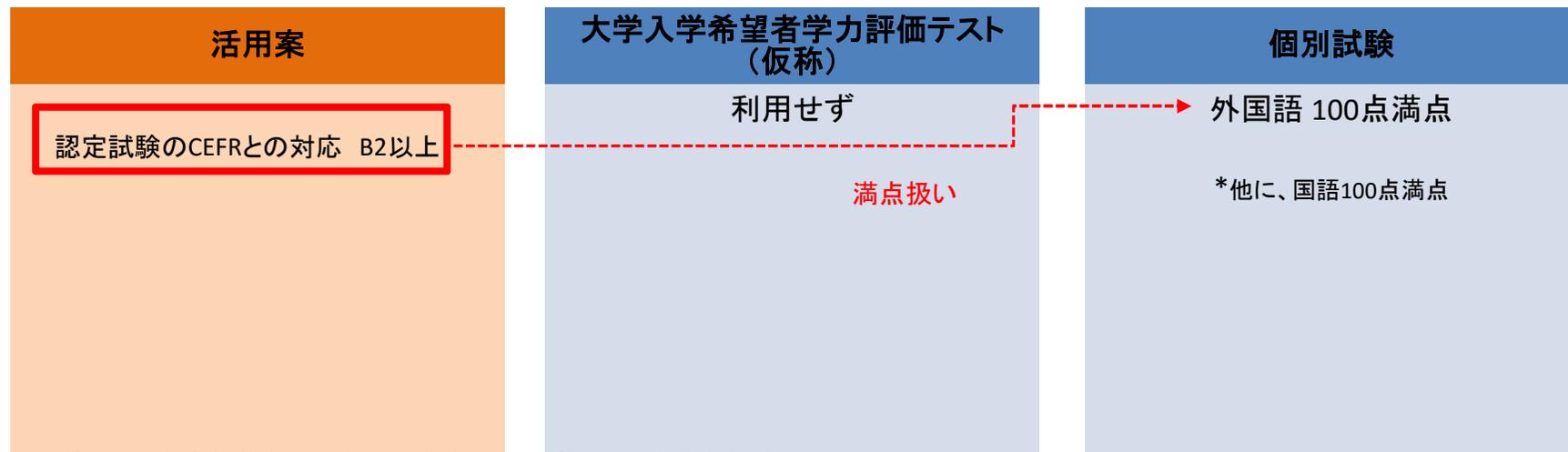
■ ○○大学(一般)



※英語の試験を満点とみなし、試験当日の英語の試験を免除



平成32年度以降の活用事例(案)

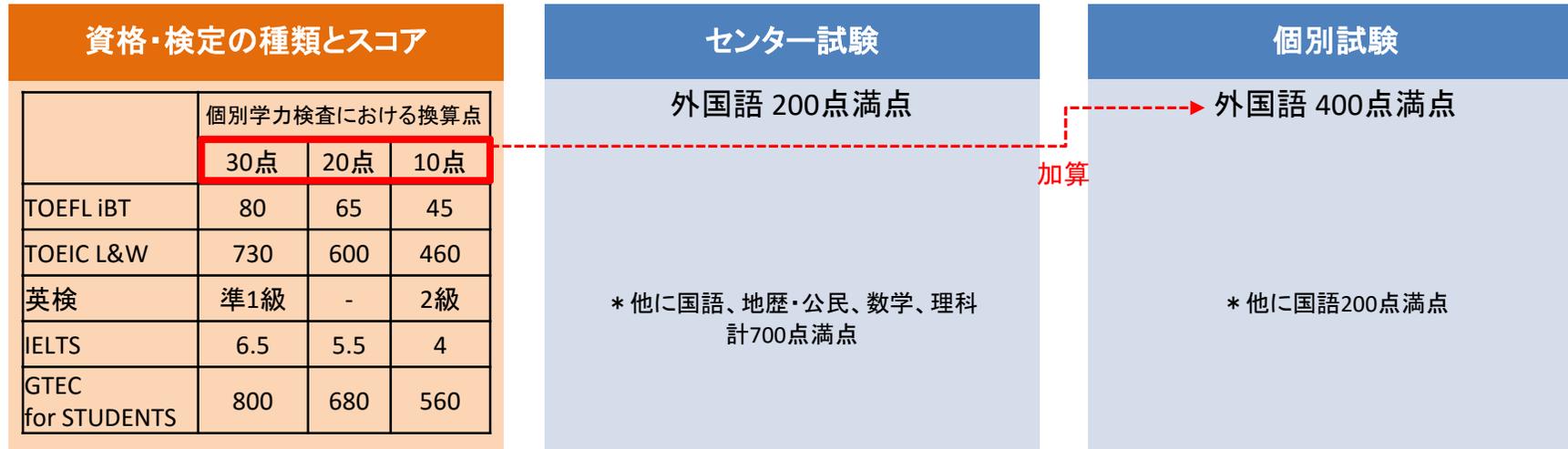


※英語の試験を満点とみなし、試験当日の英語の試験を免除

大学入学者選抜における民間の英語資格・検定試験の活用事例

③得点加算

■ ○○大学(一般)



平成32年度以降の活用事例(案)



大学入学者選抜における民間の英語資格・検定試験の活用事例

④総合判定の一要素

■ ○○大学(推薦)

資格・検定試験(試験名とスコア)

最終判定時に、下記のスコアを取得している場合、総合評価に反映

TOEFL iBT 95
TOEIC L&R,S&W 1305
英検 1級
ケンブリッジ英検 CAE
IELTS 7.0
TEAP 800
GTEC CBT 1400

センター試験

外国語 ー

個別選抜

<総合評価>

提出書類

小論文

面接

総合評価に
反映

平成32年度以降の活用事例(案)

活用案

最終判定時に、下記の段階を取得している場合、総合評価に反映

	総合評価への換算					
	S	A	B	C	D	E
認定試験の CEFRとの対応	C2	C1	B2	B1	A2	A1

大学入学希望者学力評価テスト (仮称)

外国語 ー

個別選抜

<総合評価>

提出書類

小論文

面接

総合評価に
反映

※個別学力検査の外国語(英語)の得点として、満点を上限に加算
※段階別表示については、CEFR-Jを参考に、区分で表示することも検討

英語外部検定試験を利用したAO入試について

AO入試（総合評価方式）では、英語外部検定試験を受験している場合、下記の基準・方法で受験することが可能です。
 なお、英語外部検定試験を受験していない場合でも、受験することは可能です（医学部保健学科の大学院進学位を除く）。

□出願資格を与える方法

学部	学科	専攻	受験区分	募集人員	利用方法	適用区分
医学部	保健学科	看護学専攻	大学院進学位	一般型と合わせて5	出願資格として利用	B1以上
		理学療法学専攻		3		
		作業療法学専攻		4		

□加点する方法

学部	学科・類等	利用方法・適用区分
教育学部	第三類 (言語文化教育系) 英語文化系コース	最終選考において、下表の基準に基づいて加点する。複数の英語外部検定試験を受験している場合は、適用区分の最も高い1項目のみを加点対象とする。 ※加点の適用区分：C2: 60点 C1: 40点 B2: 20点
経済学部	経済学科 昼間コース 夜間主コース	選考において、下表の基準に基づいて加点する。複数の英語外部検定試験を受験している場合は、適用区分の最も高い1項目のみを加点対象とする。 ※加点の適用区分：C2: 15点 C1: 11点 B2: 7点 B1: 3点
歯学部	歯学科 口腔健康科学科	第1次選考において、下表の基準に基づいて加点する。複数の英語外部検定試験を受験している場合は、適用区分の最も高い1項目のみを加点対象とする。 ※加点の適用区分：C2: 50点 C1: 50点 B2: 25点
薬学部	薬学科 薬科学科	最終選考において、下表の基準に基づいて加点する。複数の英語外部検定試験を受験している場合は、適用区分の最も高い1項目のみを加点対象とする。 ※加点の適用区分：C2: 20点 C1: 15点 B2: 10点 B1: 5点
工学部	第一類 (機械システム工学系)	選考において、下表の基準に基づいて加点する。複数の英語外部検定試験を受験している場合は、適用区分の最も高い1項目のみを加点対象とする。 ※加点の適用区分：C2: 20点 C1: 20点 B2: 10点 B1: 5点
	第二類 (電気・電子・システム・情報系)	選考において、下表の基準に基づいて、出願書類に満点の100点を超えない範囲で最大10点加点する。複数の英語外部検定試験を受験している場合は、適用区分の最も高い1項目のみを加点対象とする。 ※加点の適用区分：C2: 10点 C1: 10点 B2: 10点 B1: 5点
	第三類 (化学・バイオ・プロセス系)	選考において、下表の基準に基づいて加点する。複数の英語外部検定試験を受験している場合は、適用区分の最も高い1項目のみを加点対象とする。 ※加点の適用区分：C2: 10点 C1: 10点 B2: 10点 B1: 10点
	第四類 (建設・環境系)	選考において、下表の基準に基づいて加点する。複数の英語外部検定試験を受験している場合は、適用区分の最も高い1項目のみを加点対象とする。 ※加点の適用区分：C2: 20点 C1: 20点 B2: 20点
生物生産学部	生物生産学科	第1次選考において、下表の基準に基づいて加点する。複数の英語外部検定試験を受験している場合は、適用区分の最も高い1項目のみを加点対象とする。 ※加点の適用区分：C2: 10点 C1: 10点 B2: 6点 B1: 2点

□合否判定の際に評価する方法

学部	学科・類等	利用方法	適用区分
総合科学部	総合科学科	第1次選考及び最終選考において、出願書類の段階評価に反映させる。	B1以上
文学部	人文学科	第1次選考の自己推薦書の段階評価（A, B, C, Dの4段階評価）に反映させる。	B1以上
法学部	法学科 夜間主コース	選考において、小論文（200点満点）、面接（200点満点）の得点及び大学入試センター試験の結果と併せて評価する。	B1以上
理学部	生物科学科	【一般型】 第1次選考及び最終選考において、出願書類の段階評価に反映させる。 【科学オリンピック型】 選考において、出願書類の段階評価に反映させる。	適用区分は問わない

【英語外部検定試験等級又はスコア等基準表】

※各試験団体の公表資料より文部科学省において作成のもの（CEFR）を一部改変

種類 適用区分	Cambridge English	英検 (実用英語 技能検定)	GTEC CBT	IELTS™ (Academic Module)	TEAP	TOEFL iBT®	TOEFL Junior® Comprehensive	TOEIC® L&R 及び TOEIC® S&W
C2	CPE (200+)			8.5—9.0				
C1	CAE (180~199)	1級	1400	7.0—8.0	400	95—120		1305—1390 L&R945~ S&W360~
B2	FCE (160~179)	準1級	1250—1399	5.5—6.5	334—399	72—94	341—352	1095—1300 L&R785~ S&W310~
B1	PET (140~159)	2級	1000—1249	4.0—5.0	226—333	42—71	322—340	790—1090 L&R550~ S&W240~
A2	KET (120~139)	準2級	700—999	3.0	186—225		300—321	385—785 L&R225~ S&W160~
A1		3級— 5級	—699	2.0				200—380 L&R120~ S&W80~

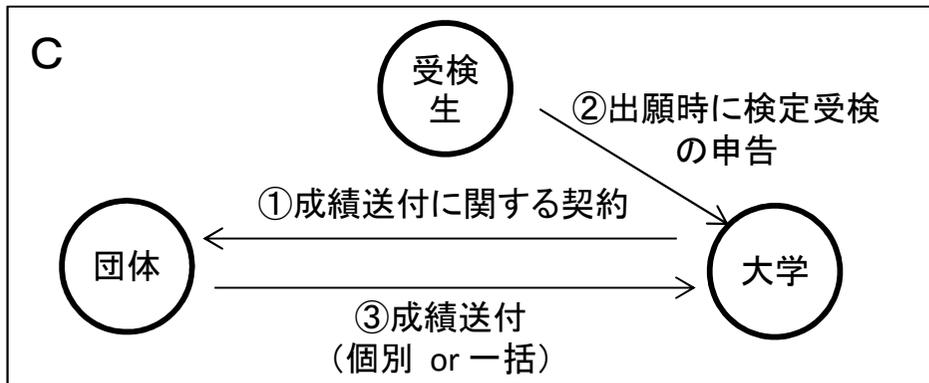
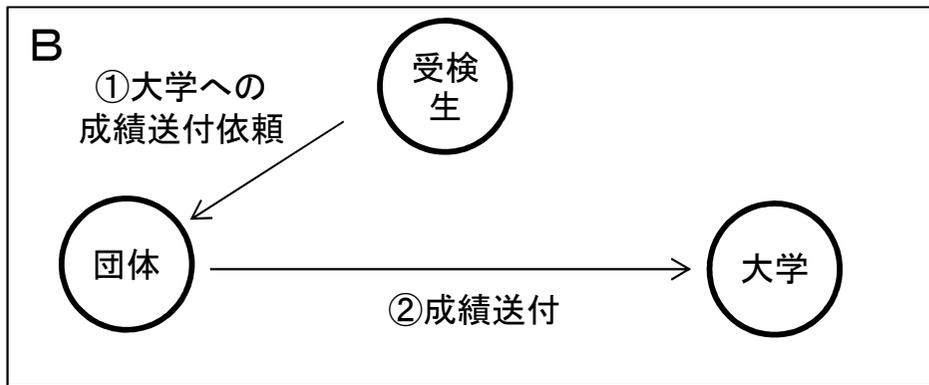
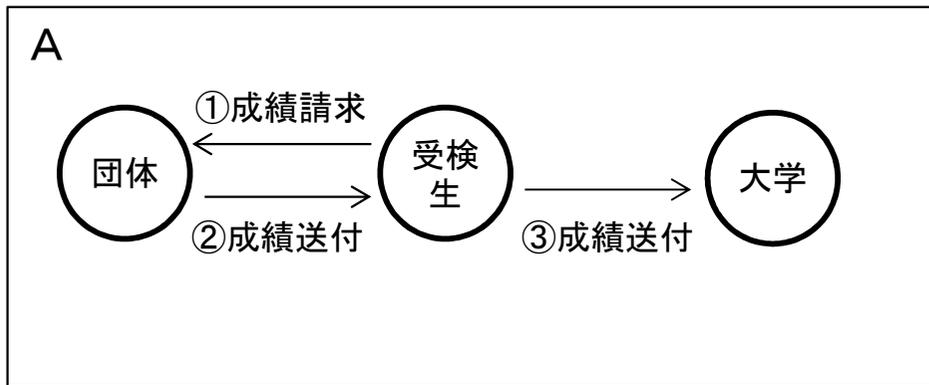
＜活用する方策＞

- このことを踏まえ、認定の仕組みと連動して、センターがデータを一元管理し、これまで個々に行われていた成績提供・受領の中核として機能することにより、
 - ① 一括した提供・受領による大学、受検生、試験団体の各手続きの簡素化とセキュリティリスクの軽減
 - ② 成績受領フォーマットが統一され、大学における成績集計の事務コストの削減
 - ③ データ蓄積による改善、様々な検証などが可能となり、50万人分のデータ管理を実現。

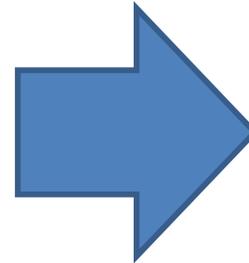
- これらにより、国公立大学における入学者選抜4技能評価を促進する環境を構築。

資格・検定試験の成績提供イメージ

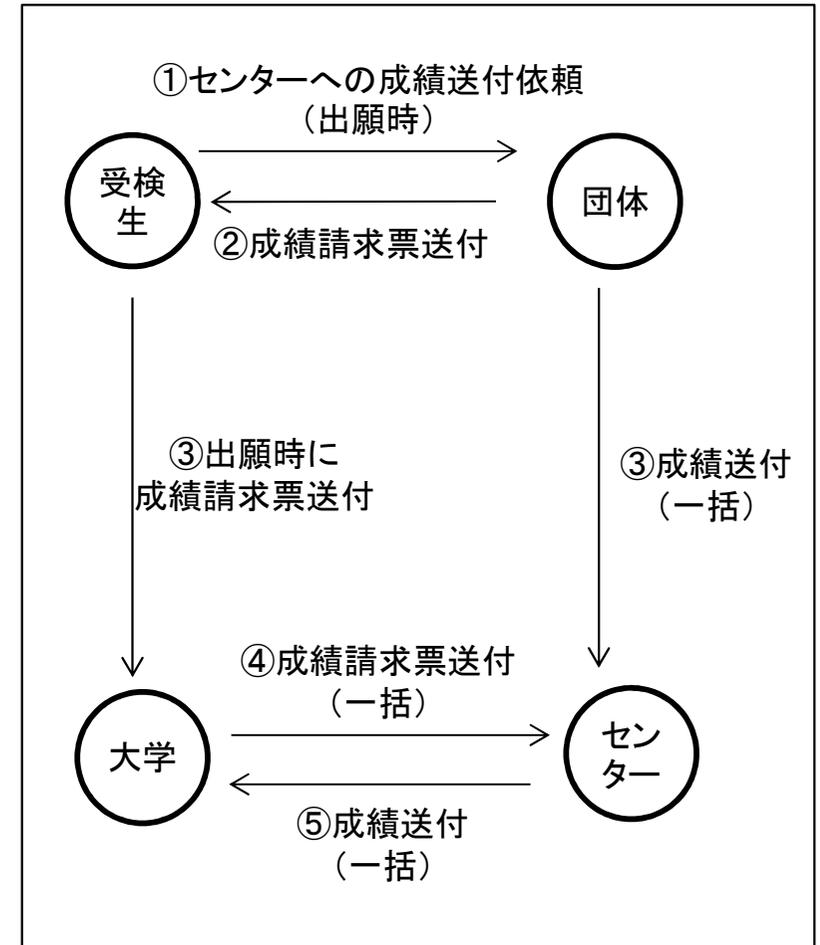
○成績提供の現状



個別対応



○センターによる一元管理

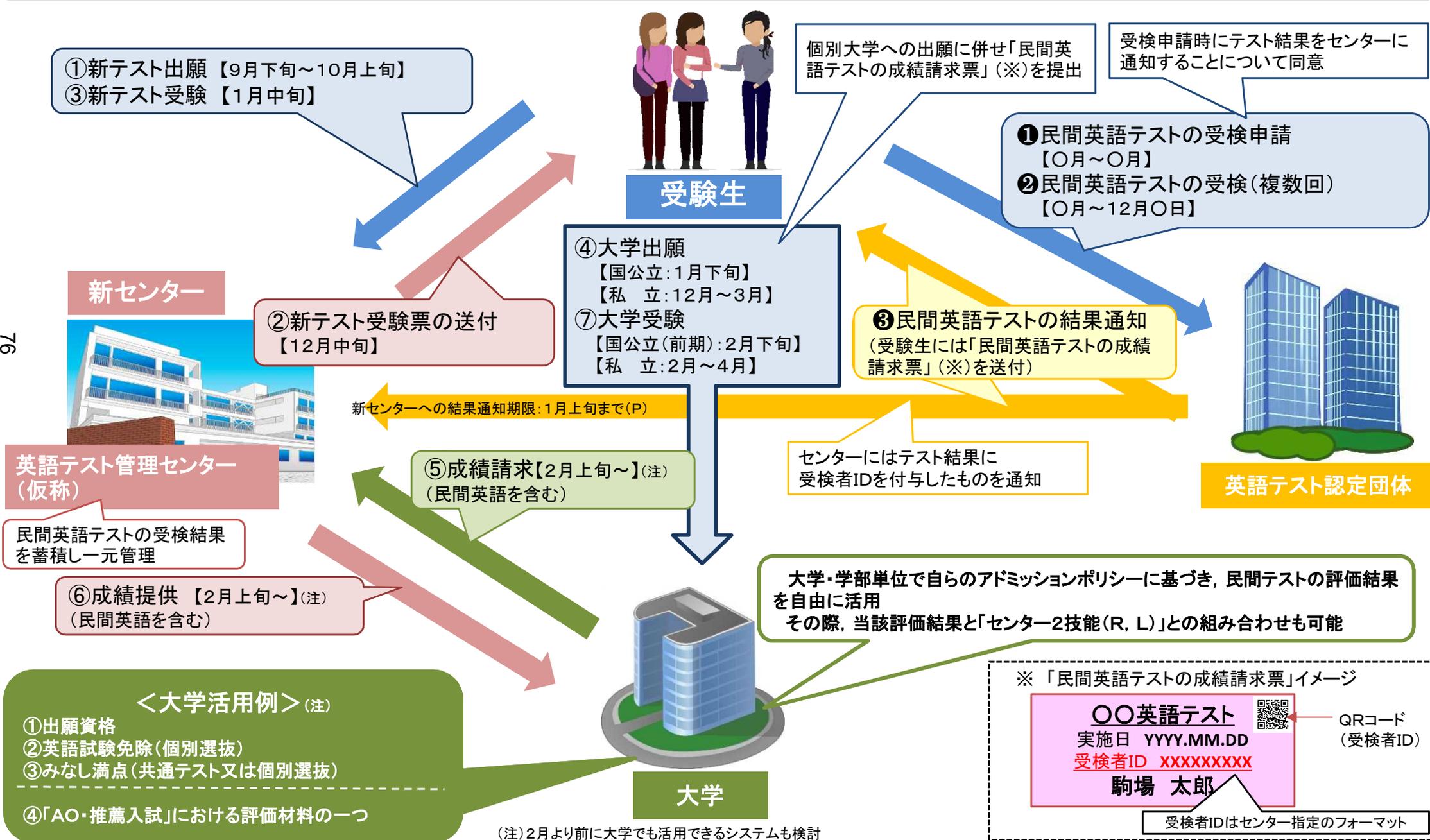


英語4技能評価に係る民間資格・検定試験の活用について

	各大学の個別選抜で直接活用する場合	センターが関与して活用する場合
メリット	<ul style="list-style-type: none"> ■ 各大学のアドミッション・ポリシーに適應した、民間の資格・検定試験を自由に選択可能。 各大学では、独自に素点(スコア)をもとに合否判定も可能。 ■ センターが担うコスト負担・責任は少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ センターが認定することにより、CEFRに対応した段階別表示など、各資格・検定試験の結果の比較ができる仕組みを提供(対照表の向上、段階別表示の細分化の検討を含む)。 ■ あわせて、学習指導要領との整合性、信頼性・妥当性、受検料負担の抑制等の観点から、必要最小限の水準を担保。 ■ センターが成績提供・受領の中核として機能することにより、大学、受検生、試験団体の手続きの簡素化とセキュリティリスクの軽減。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ■ 現状の大学入学者選抜実施要項でも、英語4技能評価を促進しているが、強制力はない。各大学が直接活用する場合、利用促進につながらない恐れ。⇒高校教育も変わらない。 ■ 資格・検定試験ごとに結果の表示が様々(段階、スコア)。大学としても、試験間の結果の比較が難しい面あり。 ■ 離島・僻地や検定料等の観点から、不利益を被る受験生が生じる可能性。 ■ 受検生が個別に手続をする必要があり、大学・試験団体ごとに対応が異なるため、手続が煩雑。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 段階別評価でしか示すことができない可能性があり、識別力が弱い。 ■ センターにおいて、一定のコスト負担・責任が生じる。

新テストにおける英語資格・検定試験(「民間英語テスト」)の活用イメージ(たたき台)【未定稿】

- 民間英語テストの結果を新テストの一環として位置付ける場合のスキーム
- 大学は「民間4技能」、「民間4技能 + センター2技能(R, L)」などを任意に選択し活用



76

- 民間の資格・検定試験の活用にあたっては、CEFRのバンドによる段階別の結果表示が基本。
- スコア表示も行う場合、受検生の負担や、試験間のスコアの換算が困難であることなどが課題。

結果表示の方法	メリット	課題
<p>①CEFRのバンドによる段階別表示</p>	<p><input type="checkbox"/>各資格・検定試験の結果とCEFRのバンドとの対応関係が検証されており、それを介して試験間の比較が可能</p> <p><input type="checkbox"/>受検の過熱化(1点刻みの選抜による、より高い得点を求める傾向)の抑制</p> <p><input type="checkbox"/>②のスコア表示の場合と比較し、バンドに含まれる範囲が広く、テストの信頼性が高い</p>	<p>■大学における入学者の選抜への活用のための工夫</p> <p>■継続的なCEFRのバンドとの対照関係の検証</p>
<p>②資格・検定試験のスコア表示</p>	<p><input type="checkbox"/>①の段階別表示の場合と比較し、刻みが細かいため、選抜に活用しやすい</p> <p><input type="checkbox"/>資格・検定試験の結果をCEFRと対応させる作業が不要</p>	<p>■受検生がよりよい得点を求めて受検回数が増加する可能性。受検生の経済的・精神的負担が増大(受検回数の制限が必要)</p> <p>■各資格・検定試験相互のスコアの換算は困難であり、各大学の活用に課題</p> <p>■資格・検定試験の中には、刻みが少ないものも存在(例:IELTS、TOEFLiBT)</p> <p>■同一の資格・検定試験の複数回のスコアにおける1点を同質のものと考えられるか。</p>

77

CEFRとの対応関係に関する検証

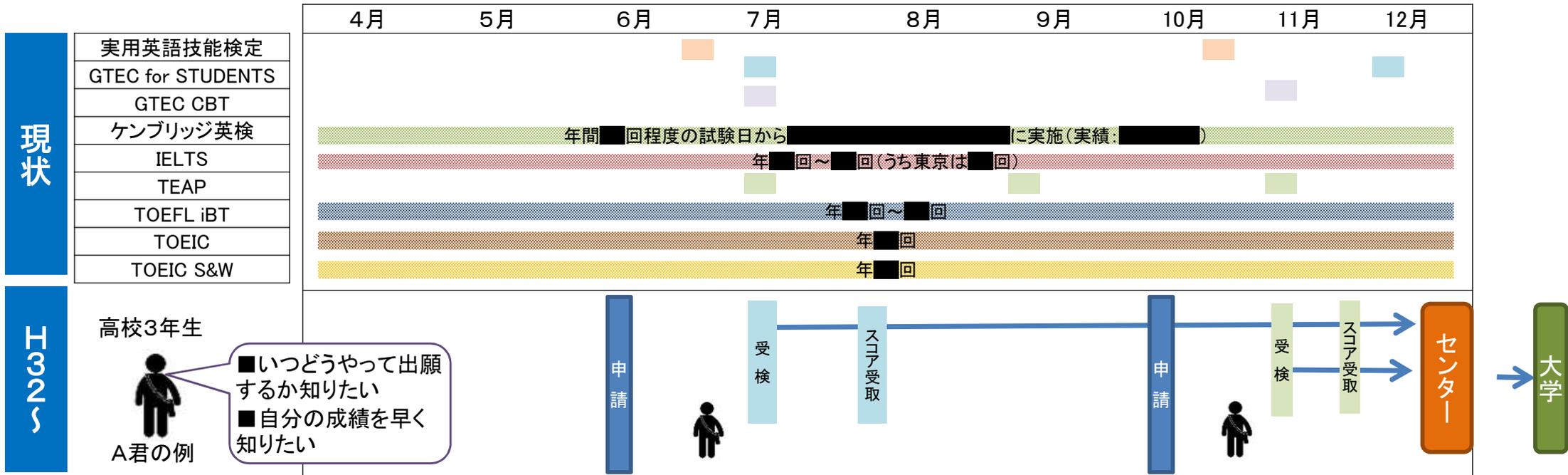
別紙5

ケンブリッジ英検 (B1レベル)	<ul style="list-style-type: none"> ・CEFRと共に開発された経緯(部分的に、CEFRはケンブリッジ英検をベースに設計)
実用英語技能検定試験 (2級)	<ul style="list-style-type: none"> ・英検Can-doリストとCEFRとの比較 ・専門家によって構成されるパネルを中心として、①Basket法*1、②Modified Angoff法*2を使用して検証 ・EALTA(欧州言語テスト・評価学会)エキスパート研究者との共同研究 ・他試験結果(TOEFL PBT,iBT等)との比較
GTEC for STUDENTS	<ul style="list-style-type: none"> ・実際のGTEC受験者によるCEFRレベル別Can-doアンケート結果により検証
IELTS	<ul style="list-style-type: none"> ・有識者によるベンチマーキング ・テスト結果使用者等による関係者からのフィードバックをもとに検証
TEAP	<ul style="list-style-type: none"> ・Can-do アンケートによるCEFRとの比較 ・独立研究機関(CRELLA)との共同研究 ・他試験結果(TOEFL ITP,iBT等)との比較
TOEFL iBT	<ul style="list-style-type: none"> ・Modified Angoff 法*2を使用 ・5,000名以上のテスト受検者データを使用 ・大学や英語教師からのCEFRレベルとTOEFLスコアレベルに関するフィードバックも活用
TOEFL junior comprehensive	<ul style="list-style-type: none"> ・Modified Angoff 法*2を使用 ・15か国、18名の有識者による検討、TOEFL Junior Standard(2技能試験)のマッピングスタディとの調整研究を
TOEIC	<ul style="list-style-type: none"> ・Modified Angoff 法*2を使用 ・22名の有識者による検討
TOEIC S&W	<ul style="list-style-type: none"> ・大学や英語教師からのCEFRレベルとTOEICスコアレベルに関するフィードバックも活用

*1 Basket法:「(問題に対して)CEFRのどのレベルにある受験者であればこの問題に正解できますか?」という分析手法

*2 Modified Angoff法:「(問題に対して)CEFRの各レベルに相当する受験者が100人いるとして、何名がこの問題に正解できるか?」という分析手法

実施時期のイメージ



課題と論点

- 高校1年生、高校2年生の時の結果を利用することを可能とするか。
- 受検回数に制限を設けるべきか。

	受検回数の制限なし	受検回数の制限あり
メリット	<ul style="list-style-type: none"> ■ 時期を選ばず複数回チャレンジ可能 ※ CEFRバンドによる段階別の結果表示とすれば、過度の受検者負担にはつながらないという考えもある。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 経済的格差や居住地による機会の不平等などの影響を抑制 ■ 受検者の受検回数による負担を軽減
課題	<ul style="list-style-type: none"> ■ 経済的格差や居住地による機会の不平等などの影響を助長する可能性 ■ 高校教育への影響(資格・検定試験対策に追われる可能性) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 個人の資格形成に資する民間試験の受検を制限することの妥当性 ■ 制限する回数の妥当性の担保 ■ 設定した回数以上の受検をした受検者の把握をどのように行うか、また、そうした受検者に対してどのような対応が可能か(実効性を担保するためのペナルティーを課すことは困難)

英語 4 技能評価実施方法のイメージ

別紙8

実施方法のイメージ

現
状

実用英語技能検定	■会場(■)
GTEC for STUDENTS	■会場(■)
GTEC CBT	■会場(■)
ケンブリッジ英検	■会場(■)
IELTS	■会場(■)
TEAP	■会場(■)
TOEFL iBT	■会場(■)
TOEIC	■会場(■)
TOEIC S&W	■会場(■)

センター会場	
大学	621会場
高校	64会場
点字会場	8会場
離島・僻地	23会場

外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠（CEFR）について

別添1

- CEFR（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment）は、語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、分かりやすい、包括的な基盤を提供するものとして、20年以上にわたる研究を経て策定された。欧州域内外で使われている。
- 欧州域内では、国により、CEFRの「共通参照レベル」が、初等教育、中等教育を通じた目標として適用されたり、欧州域内の言語能力に関する調査を実施するにあたって用いられたりするなどしている。

熟練した言語使用者	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。
自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

（出典） ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学英語検定機構

各試験団体のデータによるCEFRとの対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	GTEC for STUDENTS	IELTS	TEAP	TEAP CBT	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)				8.5-9.0					
C1	CAE (180-199)	1級 (2630-3400)	1400		7.0-8.0	400	800	95-120		1305-1390 L&R 945~ S&W 360~
B2	FCE (160-179)	準1級 (2304-3000)	1250-1399	980 L&R&W 810	5.5-6.5	334-399	600-795	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785~ S&W 310~
B1	PET (140-159)	2級 (1980-2600)	1000-1249	815-979 L&R&W 675-809	4.0-5.0	226-333	420-595	42-71	322-340	790-1090 L&R 550~ S&W 240~
A2	KET (120-139)	準2級 (1284-1800)	700-999	565-814 L&R&W 485-674	3.0	150-225	235-415		300-321	385-785 L&R 225~ S&W 160~
A1		3級-5級 (419-1650)	-699	-564 L&R&W -484	2.0					200-380 L&R 120~ S&W 80~

英検：日本英語検定協会 <http://www.eiken.or.jp/forteachers/data/cefr/>
http://www.eiken.or.jp/association/association/info/2015/pdf/20151218_pressrelease_CSE2.pdf

TOEFL：米国ETS <http://www.ets.org/Media/Research/pdf/RM-15-06.pdf?WT.ac=clk>

IELTS：ブリティッシュ・カウンシル（および日本英語検定協会）資料より

TEAP：第1回 英語力の評価及び入試における外部試験活用に関する検討会 吉田研作教授資料より

Cambridge English（ケンブリッジ英検）：ケンブリッジ大学英語検定機構 <http://www.cambridgeenglish.org/exams-and-qualifications/cefr/cefr-exams/>
<http://www.cambridgeenglish.org/exams/cambridge-english-scale/>

GTEC：ベネッセコーポレーションによる資料より
「L&R&W」の記載が無い数値が4技能の合計点

TOEIC：IIBC <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/about/result.html>
「L&R」または「S&W」の記載が無い数値が4技能の合計点

※各試験団体の公表資料より文部科学省において作成

主な英語の資格・検定試験

試験名	Cambridge English	英検	GTEC CBT	GTEC for STUDENTS	IELTS	TEAP	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC	TOEIC S&W
実施団体	ケンブリッジ大学 英語検定機構	日本英語検定 協会	ベネッセコーポ レーション Berlitz Corporation ELS Educational Services ※一般財団法人進学 基準研究機構(CEES) と共催	ベネッセコーポレ ーション Berlitz Corporation ELS Educational Services	ブリティッシュ・カウ ンシル、 ケンブリッジ大学英 語検定機構 日本英語検定協会 等	日本英語検定 協会	テスト作成： ETS 日本事務局： CIEE	テスト作成： ETS 日本事務局： GC&T	テスト作成： ETS 日本事務局： IIBC	テスト作成：ETS 日本事務局： IIBC
受験人数	国内人数非公表 ※全世界では約 250万人	約263.5万人 (H26実績)	非公表	約81万人 (H27見込)	約3.6万人 (H27速報値) ※全世界では250万人	約1.3万人 (H27実績)	非公表	非公表	約240万人 (H26実績) ※TOEICプログラム 全世界約700万人	約2.4万人 (H26実績) ※TOEICプログラム 全世界約700万人
回数 年間	2-3回	3回	3回	2回	約35回	3回	40-45回	2-3回	10回	24回
会場数	全国12会場	公開会場230都市 400会場+準会場 (離島含)17,000会 場	全国57会場	学校会場	—	全国30会場	全国90会場	全国170会場	全国256会場	全国43会場
成績表示 方法	KET/PET/FCE/CA E/CPE(5つ) CEFR、合否、 スコア(80-230)、グ レード	1級~5級 合否による表示 H27~スコア・バンド 併記	0-1400点	0-810点 (S 0-170点)	1.0-9.0 (0.5刻み)	80-400点	0-120点 (4技能を各0- 30点で評価)	0-352点	10-990点 (L、R各5-495 点)	0-400点 (S、W各0-200点)
実施 形式	L, R, W: 紙/CBT S: ペア面接	L, R: 紙/CBT (W): 紙 (S): 面接/CBT (*2)	L, S, R, W: CBT	L, R, W: 紙 S: タブレット	L, R, W: 紙 S: 面接	L, R, W: 紙 S: 面接 (*4)	L, S, R, W: CBT	L, S, R, W: CBT	L, R: 紙	S, W: CBT
受験料	PET(B1) 11,880 円~ KET(A2) 9,720円~(※5)	2級: 5,000円 準2級: 4,500円	9,720円	3,080円 L, R, W 5,040円 L, R, W, S	25,380円	15,000円	230USドル	9,500円	5,725円	10,260円

*1: L=Listening, S=Speaking, R=Reading, W=Writing

*3: Sはオプション

*4: L/R, L/R/Wでも受験可能

*2: Wは1級・準1級(H28から2級に導入), Sは3級以上(H28から4級・5級に導入)

*5: 実施試験センターにより異なることあり

- ◆ 英語の資格・検定試験の認定にあたっては、当該認定資格・検定試験の試験内容が現行の高等学習指導要領「コミュニケーション英語I」「コミュニケーション英語II」及び「英語表現I」の学習を通じて得られる力を測定することが可能なものかについて、目標、言語活動、言語の使用場面、言語の働き、言語材料等の面から総合的に判断する。
- ◆ その際、複数の技能を有機的に関連付けた言語活動を通じて総合的に指導することを求める現行学習指導要領の趣旨を踏まえ、英語4技能の能力を総合的に測定することができる資格・検定試験を認定することを基本とする。
- ◆ また、資格・検定試験が測定可能な英語力の水準については、第2期教育振興基本計画において、学習指導要領に基づき達成される英語力の目標として、高等学校卒業段階で英検準2級程度（※CEFRのA2相当）～2級程度（※CEFRのB1相当）以上とされていること等を踏まえ、認定試験がCEFRのA2及びB1の能力を測定することが可能であることを求める。
- ◆ なお、次期高等学校学習指導要領の外国語科においては、
 - 小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、国際的な基準であるCEFRなどを参考に、段階的に実現する指標形式の目標(CAN-DO形式の目標)を設定すること
 - 高等学校卒業段階で求められる力として、必修科目でCEFRのA2相当、選択科目で同B1相当を想定していることが中教審答申で示されていることを踏まえると、以上の方法で認定試験と学習指導要領の整合性を図ることによって、平成32年度の新テスト実施段階から、平成36年度以降の次期学習指導要領下における新テスト実施を見据えた対応が可能。

参考1

教育振興基本計画(平成25年6月14日閣議決定)(抄)

成果目標5

【成果指標】<グローバル人材関係>

①国際共通語としての英語力の向上

・学習指導要領に基づき達成される英語力の目標(中学校卒業段階:英検3級程度以上、高等学校卒業段階:英検準2級程度～2級程度以上)を達成した中高生の割合50%

基本施策16

【主な取組】

16-1 英語をはじめとする外国語教育の強化

・(略)……大学入試においても、高等学校段階で育成される英語力を適切に評価するため、TOEFL等外部検定試験の一層の活用を目指す。

(参考2) 現行高等学校学習指導要領(外国語科)における目標、言語活動、言語の使用場面、言語の働き、言語材料

	目標	言語活動	言語の使用場面・言語の働き	言語材料
高等学校学習指導要領 「コミュニケーション英語Ⅰ」	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を養う。	ア 事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。 イ 説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。また、聞き手に伝わるように音読する。 ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。 エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く。	次に示すような言語の使用場面や言語の働きの中から、各科目の目標を達成するのにふさわしいものを適宜取り上げ、有機的に組み合わせて活用する。 [言語の使用場面の例] a 特有の表現がよく使われる場面： ・買物／旅行／食事／電話での応答／手紙や電子メールのやりとりなど b 生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面： ・家庭での生活／学校での学習や活動／地域での活動／職場での活動など c 多様な手段を通じて情報などを得る場面： ・本、新聞、雑誌などを読むこと／テレビや映画などを観ること／情報通信ネットワークを活用し情報を得ることなど [言語の働きの例] a コミュニケーションを円滑にする： ・相づちを打つ・聞き直す・繰り返す／言い換える／話題を発展させる／話題を変えるなど b 気持ちを伝える： ・褒める／謝る／感謝する／望む／驚く／心配するなど c 情報を伝える： ・説明する／報告する／描写する／理由を述べる／要約する／訂正するなど d 考えや意図を伝える： ・申し出る／賛成する／反対する／主張する／推論する／仮定するなど e 相手の行動を促す： ・依頼する／誘う／許可する／助言する／命令する／注意を引くなど	中学校学習指導要領第2章第9節第2の2の(3)及び次に示す言語材料の中から、それぞれの科目の目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる。その際、「コミュニケーション英語Ⅰ」においては、言語活動と効果的に関連付けながら、ウに掲げるすべての事項を適切に取り扱うものとする。 ア 語、連語及び慣用表現 (ア) 語 a「コミュニケーション英語Ⅰ」にあつては、中学校で学習した語に400語程度の新語を加えた語 b「コミュニケーション英語Ⅱ」にあつては、aに示す語に700語程度の新語を加えた語 c(略) d「コミュニケーション英語基礎」,「英語表現Ⅰ」,「英語表現Ⅱ」及び「英語会話」にあつては、生徒の学習負担を踏まえた適切な語 (イ) 連語及び慣用表現のうち、運用度の高いもの イ 文構造のうち、運用度の高いもの ウ 文法事項 (ア) 不定詞の用法 (イ) 関係代名詞の用法 (ウ) 関係副詞の用法 (エ) 助動詞の用法 (オ) 代名詞のうち、itが名詞用法の句及び節を指すもの (カ) 動詞の時制など (キ) 仮定法 (ク) 分詞構文
高等学校学習指導要領 「コミュニケーション英語Ⅱ」	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を伸ばす。	ア 事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。 イ 説明、評論、物語、随筆などについて、速読したり精読したりするなど目的に応じた読み方をする。また、聞き手に伝わるように音読や暗唱を行う。 ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合うなどして結論をまとめる。 エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、まとまりのある文章を書く。		
高等学校学習指導要領 「英語表現Ⅰ」	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う。	ア 与えられた話題について、即興で話す。また、聞き手や目的に応じて簡潔に話す。 イ 読み手や目的に応じて、簡潔に書く。 ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表する。		

**「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の
英語の「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」を評価する問題で
評価すべき能力や作問の構造について（案）**

1. 英語の「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」を評価する問題と「思考のプロセス」の関係

(1) 次期学習指導要領における「思考のプロセス」及び外国語において育成すべき資質・能力の整理

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（平成 28 年 12 月 21 日中央教育審議会答申）（以下「中教審答申」）では、言語能力を構成する資質・能力が働く過程として、「思考のプロセス」を、「テキスト（情報）の理解」と「文章や発話による表現」を柱に整理している。

まず、「テキスト（情報）の理解」については、テキストの構造と内容を把握し、精査・解釈し、考えを形成する「認識から思考へ」という過程をたどる。

更に、「文章や発話による表現」については、表現するテーマ・内容、構成・表現形式を検討しながら、考えを形成・深化させ、表現するという、「思考から表現へ」という過程をたどると整理している。

その上で、言葉を直接の学習対象とする国語教育及び外国語教育の果たす役割が大きく、言語能力を構成する資質・能力やそれらが働く過程、育成の在り方を踏まえながら、改善・充実を図ることが必要とされている。

加えて、外国語の学習においては、国際的な基準である CEFR（外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠）などを参考に、外国語学習の特性を踏まえて「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」を一体的に育成し、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして段階的に実現する指標形式の目標（CAN-DO形式の目標）を設定することとされている。

(2) 英語の「聞くこと」「読むこと」を評価する問題と「思考のプロセス」

英語の「聞くこと」「読むこと」を評価する問題では、まず、上記（1）のうち「テキスト（情報）の理解」（構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成の一部）を経た後、出題者が提示した選択肢の中から、思考の結果と適合するものを選択したり、単語等を短答形式で記述したりする形で、解答する。

(3) 英語の「話すこと」「書くこと」を評価する問題と「思考のプロセス」

これに対して、英語の「話すこと」「書くこと」を評価する問題では、上記（2）の「テキスト（情報）の理解」に加えて、考えたことを文章化したり、発話したりする「文章や発話による表現」（内容・テーマの検討、構成・表現形式の検討、考えの形成・深化、推敲、表現）を経ることが特徴である。

このように、「聞くこと」「読むこと」に加えて、「話すこと」「書くこと」を評価することは、「聞くこと」「読むこと」のみを評価することと比べて、以下の利点が挙げられる。

- α. 思考に当たっての主体性が発揮される
- β. 結論に至る思考のプロセスの自覚が促される
- γ. 表現力の発揮が図られる

2. 共通テストと個別選抜の二次試験とでそれぞれ評価すべき能力や作問の考え方

- 上記の整理を踏まえつつ、英語において評価すべき力の内容としては、以下の4種類に大別でできる。
 - ①テキスト（情報）の内容を把握する力
 - ②テキスト（情報）の内容を精査・解釈する力
 - ③テキスト（情報）を元に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現する力
 - ④テキスト（情報）を元にテーマ・内容、構成や表現形式を検討しながら考えを形成・深化させ、文章や発話によって表現する力

- これまでの大学入学者選抜等における英語の問題では、「聞くこと」や「読むこと」の評価の中心となる、「①テキスト（情報）の内容を把握する力」や、「②テキスト（情報）の内容を精査・解釈する力」を問う問題が中心となっている。
今後は、大学入学者選抜等においても、「話すこと」「書くこと」の測定によって、「③テキスト（情報）を元に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現する力」や「④テキスト（情報）を元にテーマ・内容、構成や表現形式を検討しながら考えを形成・深化させ、文章や発話によって表現する力」を評価することが重要である。
（別紙①参照）

- なお、中教審答申では、高等学校卒業段階で求められる力として、必修科目でCEFRのA2相当、選択科目で同B1相当が想定されている。
このことを踏まえ、共通テストの英語においては、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の測定において、CEFRのA2相当及びB1相当の能力を測定することが可能なテストとすることが必要。

3. 共通テストにおける資格・検定試験の活用の在り方について

- 英語においては、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」を測定する複数の資格・検定試験があり、その多くがCEFRの段階的な指標形式の能力記述文に示された力を測定することを目的としているか、各資格・検定試験における得点がCEFRの各段階で求められる力とどのような対照関係にあるのかについての専門的な検証が行われているものである。

- 以上を踏まえ、共通テストにおいては、2. に掲げる内容を測定することが可能なテストであることを確認した上で、資格・検定試験を認定し、評価を行うことを基本とする。

- なお、大学入試センターが現在実施している、マークシート方式の「読むこと」及び「聞くこと」についての英語2技能試験（以下、「センター2技能試験」）を、当面の間、共通テストの一部として活用する場合には、2. に掲げる共通テストとして評価すべき内容に照らし、
 - ・ 2技能センター試験において「読むこと」及び「聞くこと」についてCEFRのA2相当及びB1相当の能力を測定することが可能となるよう、作問の在り方及び測定内容のCEFRに照らした検証の方法について、改善を行うこと
 - ・ センター2技能試験を受験する場合であっても、資格・検定試験の「話すこと」及び「書くこと」の結果と併せて4技能の評価ができるよう、センター2技能試験の評価方法及び結果表示の方法について、改善を行うことが求められる。

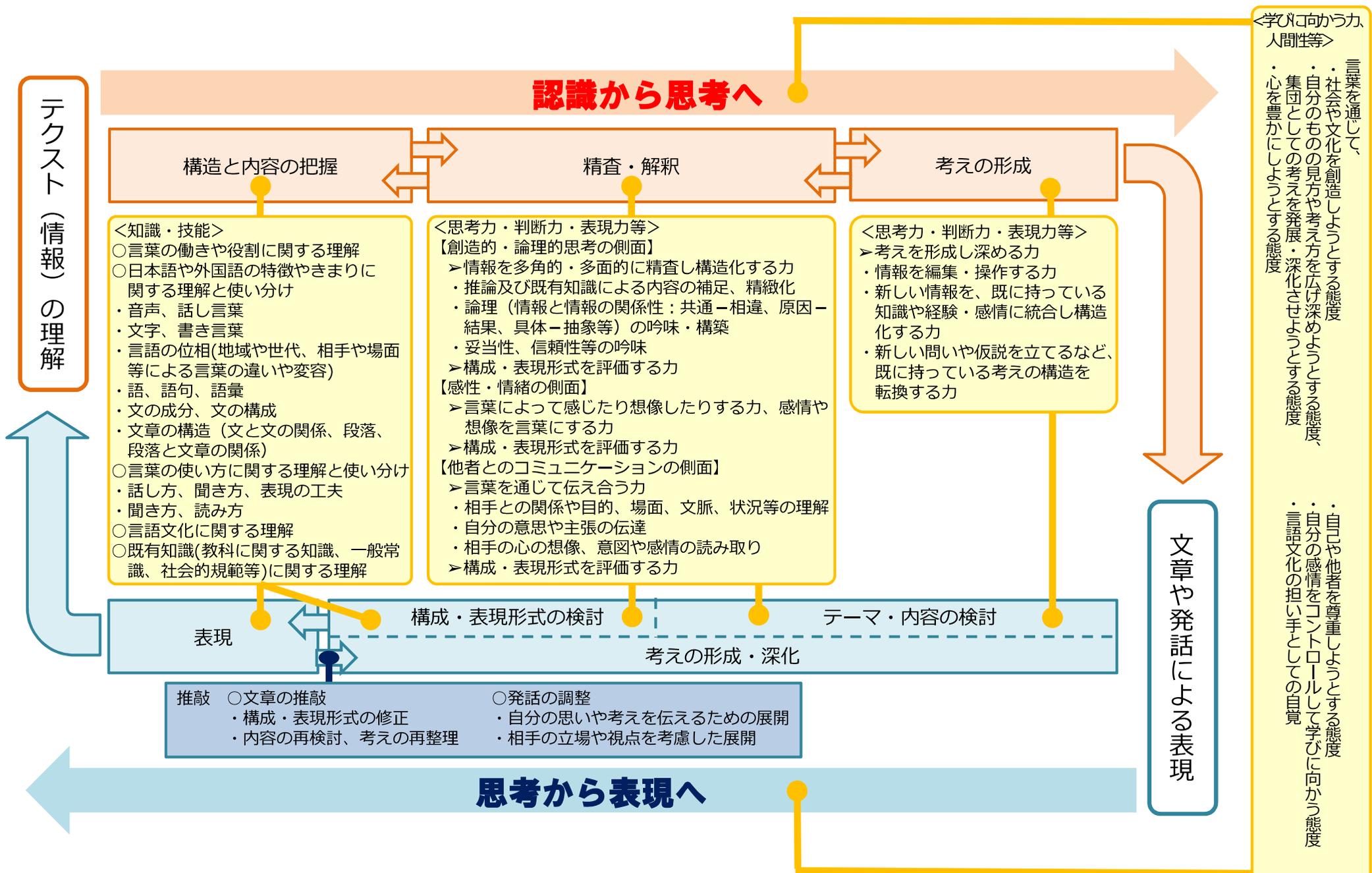
解答させる内容と資質・能力、出題形式との関係について 【英語】

別紙①

	認識から思考へ		思考から表現へ	
	構造と内容の把握	精査・解釈	考えの形成	考えの形成・深化
				テーマ・内容の検討 構成・表現形式の検討
「聞くこと」 「読むこと」	短い簡単なメッセージやアナウンスを聞いて、必要な情報を聞き取ることができるようにする。【L-A2】			
	日常生活において身の回りにある英語の中の語句や単純な文を理解できるようにする。【R-A1】			
	身近な話題や知識のある社会的な話題に関する短い会話を聞いて、概要や要点を理解することができるようにする。【L-B1】	身近な話題や知識のある社会的な話題に関する短い会話を聞いて、概要や要点を理解することができるようにする。【L-B1】		
	身近な話題に関する複雑な流れの議論を聞いて、話の展開を理解できるようにする。【L-B2】	身近な話題に関する複雑な流れの議論を聞いて、話の展開を理解できるようにする。【L-B2】		選択式・短答式
	身近な話題に関する比較的短い記事やレポート、資料から、必要な情報を読み取ることができるようにする。【R-B1】	身近な話題に関する比較的短い記事やレポート、資料から、必要な情報を読み取ることができるようにする。【R-B1】		
	社会的な話題に関する短い会話や説明を読んで、概要や要点を理解できるようにする。【R-B1】	社会的な話題に関する短い会話や説明を読んで、概要や要点を理解できるようにする。【R-B1】		
時事問題や社会問題に関する記事やレポート、資料を読んで、概要や要点、筆者の姿勢や視点を理解できるようにする。【R-B2】	時事問題や社会問題に関する記事やレポート、資料を読んで、概要や要点、筆者の姿勢や視点を理解できるようにする。【R-B2】			
「話すこと」(やりとり)	相手の発話を理解できない場合など、必要に応じて、聞き返したり意味を確認したりすることができるようにする。【SI-A1】	相手の発話を理解できない場合など、必要に応じて、聞き返したり意味を確認したりすることができるようにする。【SI-A1】		短答式又は面接式
		日常生活や自分に関連した事柄に関する短い簡単なやりとりをすることができるようにする。【SI-A2】	日常生活や自分に関連した事柄に関する短い簡単なやりとりをすることができるようにする。【SI-A2】	面接式
「話すこと」(発表) 「書くこと」		自分が必要とする事柄について、短い簡単なメモやメッセージなどを書くことができるようにする。【W-A2】	自分が必要とする事柄について、短い簡単なメモやメッセージなどを書くことができるようにする。【W-A2】	短答式・記述式
			知識のある時事問題や社会問題について、内容を具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて話すことができるようにする。【SP-B1】	知識のある時事問題や社会問題について、内容を具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて話すことができるようにする。【SP-B1】
	面接式又は録音式(「話すこと」) 記述式(「書くこと」)		関心のある分野のテーマについて、まとまりのある文章で具体的に説明するとともに、自分の意見やその理由を加えて書くことができるようにする。【W-B1】	関心のある分野のテーマについて、まとまりのある文章で具体的に説明するとともに、自分の意見やその理由を加えて書くことができるようにする。【W-B1】
(技能統合型)		多様な考え方ができる時事問題や社会問題について、様々な見方の長所・短所を示すとともに、自分の意見を幅広い表現を用いて論理的に説明することができるようにする【SP-B2】	多様な考え方ができる時事問題や社会問題について、様々な見方の長所・短所を示すとともに、自分の意見を幅広い表現を用いて論理的に説明することができるようにする【SP-B2】	多様な考え方ができる時事問題や社会問題について、様々な見方の長所・短所を示すとともに、自分の意見を幅広い表現を用いて論理的に説明することができるようにする【SP-B2】
		時事問題や社会問題など幅広い話題について、得た情報を活用しながら、自分の意見やその理由を論理的に書くことができるようにする。【R-B2】	時事問題や社会問題など幅広い話題について、得た情報を活用しながら、自分の意見やその理由を論理的に書くことができるようにする。【R-B2】	時事問題や社会問題など幅広い話題について、得た情報を活用しながら、自分の意見やその理由を論理的に書くことができるようにする。【R-B2】

※ 「『外国語』等における国の指標形式の目標(イメージ)たたき台」(中教審答申別添13-2)に掲げるCEFRの各レベルにおける目標からそれぞれ主要なものを抜粋

言語能力を構成する資質・能力が働く過程のイメージ(案)



「外国語」等における小・中・高等学校を通じた国の指標形式の目標（イメージ）たたき台

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（平成28年12月21日中央教育審議会答申）別添13-3

複数の力を統合的に扱う言語活動を通して求められる英語力を身に付ける

校種	CEFR レベル	聞くこと	読むこと	話すこと（やり取り）	話すこと（発表）	書くこと
高等学校 ↑ 92 中学校 ↑ 小学校	B2	<ul style="list-style-type: none"> ○母語話者同士による多様な話題の長い会話を聞いて、概要や要点を理解できるようにする。 ○身近な話題に関する複雑な流れの議論を聞いて、話の展開を理解できるようにする。 ○自然な速さで話される時事問題や社会問題に関する長い説明を聞いて、概要や要点を理解できるようにする。 ○ある程度知識のある社会問題や時事問題に関するラジオ番組やテレビ番組を視聴して、概要や要点を理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○関心のある分野の記事や資料から、必要な情報を読み取ることができるようにする。 ○興味のある現代小説や随筆を読んで、概要を理解することができるようにする。 ○時事問題や社会問題に関する記事やレポート、資料を読んで、概要や要点、筆者の姿勢や視点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○幅広い話題に関する会話に参加し、情報や自分の意見などを適切かつ流暢に表現することができるようにする。 ○知識のある時事問題や社会問題について、幅広い表現を用いて議論することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○幅広い話題について、即興で、説明したり自分の考えや気持ちなどを話したりすることができるようにする。 ○幅広い分野のテーマについて、明瞭かつ詳細な説明をすることができる。 ○多様な考え方ができる時事問題や社会問題について、様々な見方の長所・短所を示すとともに、自分の意見を幅広い表現を用いて論理的に説明することができるようにする。 ○聴衆の反応に応じて、発表の内容や方法を調整することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○関心のある分野のテーマについて、事実や情報などを明確且つ詳細に伝える説明文を書くことができるようにする。 ○時事問題や社会問題など幅広い話題に関する記事や資料を読んで、その概要や要点を書いてまとめることができるようにする。 ○時事問題や社会問題など幅広い話題について、得た情報を活用しながら、自分の意見やその理由を論理的に書くことができるようにする。 ○Eメール、エッセイ、レポートなどをそれぞれの用途に合った文体で書くことができるようにする。
	B1	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な話題や知識のある社会的な話題に関する短い会話を聞いて、概要や要点を理解することができるようにする。 ○比較的ゆっくりはっきりと話されれば、時事問題や社会問題に関する短い平易な説明を聞いて、要点を理解することができるようにする。 ○比較的ゆっくりはっきりと話されれば、馴染みのある話題を扱ったラジオ番組やテレビ番組を視聴して、要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な話題に関する比較的短い記事やレポート、資料から、必要な情報を読み取ることができるようにする。 ○短い物語を読んで、あらすじを理解することができるようにする。 ○社会的な話題に関する短い会話や説明を読んで、概要や要点を理解できるようにする。 ○英語学習を目的として書かれた記事やレポートを読んで、概要や要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○公共の場所（店、駅など）において、自分の問題を説明、解決することができるようにする。 ○身近な話題や興味関心のある事柄について、準備をしないで会話に参加することができるようにする。 ○身近な話題や知識のある話題について、簡単な英語を用いて情報や意見を交換することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な話題や関心のある事柄について、即興で説明することができるようにする。 ○身近な話題や関心のある事柄について、まとまりのある内容を話すことができるようにする。 ○関心のある分野のテーマに関する記事やレポート、資料の概要や要点を説明することができるようにする。 ○知識のある時事問題や社会問題について、内容を具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて話すことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の経験や身近な事柄について、複数のパラグラフから成る説明文を書くことができるようにする。 ○関心のある分野のテーマに関する記事や資料を読んで、その概要や要点を書いてまとめることができるようにする。 ○関心のある分野のテーマについて、まとまりのある文章で具体的に説明するとともに、自分の意見やその理由を加えて書くことができるようにする。
	A2	<ul style="list-style-type: none"> ○短い簡単なメッセージやアナウンスを聞いて、必要な情報を聞き取ることができるようにする。 ○身近な話題に関する短い会話を聞いて、概要や要点を理解することができるようにする。 ○ゆっくりはっきりと話されれば、身近な事柄に関する短い説明の要点を理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日常生活において身の回りにある短い平易なテキストから、必要な情報を読み取ることができるようにする。 ○平易な英語で書かれた短い物語を読んで、あらすじを理解できるようにする。 ○身近な話題に関して平易な英語で書かれた短い説明や手紙を読んで、概要や要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日常生活や自分に関連した事柄に関する短い簡単なやり取りをすることができるようにする。 ○身近な話題や興味関心のある事柄について、ある程度準備をすれば、会話に参加することができるようにする。 ○身近な話題について、簡単な英語を用いて簡単な意見交換をすることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な事柄や出来事について、簡単な単語や文を用いて即興で話すことができるようにする。 ○身近な話題や関心のある事柄について、簡単な説明をすることができるようにする。 ○身近な話題について、自分の意見やその理由を簡単に話すことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分が必要とする事柄について、短い簡単なメモやメッセージなどを書くことができるようにする。 ○身近な事柄について、簡単な単語や表現を用いて、短い説明文を書くことができるようにする。 ○聞いたり読んだりした内容について、簡単な単語や表現を用いて、自分の意見や感想を書くことができるようにする。
	A1	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶や簡単な指示を聞いて理解することができるようにする。 ○日常生活において必要となる基本的な情報を聞き取ることができるようにする。 ○ゆっくりはっきりと話されれば、身の回りの事柄に関する平易でごく短い会話や説明を、視覚情報などを参考にしながら理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日常生活において身の回りにある英語の中の単語や単純な文を理解できるようにする。 ○平易な英語で書かれたごく短い物語を読んで、視覚情報などを参考にしながら、あらすじを理解することができるようにする。 ○身の回りの事柄に関して平易な英語で書かれたごく短い説明を読んで、視覚情報などを参考にしながら、概要を理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○相手の発話を理解できない場合など、必要に応じて、聞き返したり意味を確認したりすることができるようにする。 ○相手のサポート（ゆっくり話す、繰り返す、言い換える、自分が言いたいことを表現するのに助け船をだしてくれる など）があれば、ごく身近な話題について、簡単な表現を使って質疑応答をすることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○簡単な単語や文を用いて、自分について話すことができるようにする。 ○日常生活において必要となる基本的な情報を伝えることができるようにする。 ○ごく身近な事柄や出来事について、事実、自分の考えや気持ちなどを、簡単な単語や文を用いて短く話すことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分に関するごく限られた情報を、簡単な単語や文を用いて書くことができるようにする。 ○ごく身近な事柄について、簡単な単語や文を用いて書くことができるようにする。
(Pre-A1)	<ul style="list-style-type: none"> ○アルファベットの発音を聞いて、どの文字であるかがわかるようにする。 ○挨拶や短いごく簡単な指示を聞いて理解することができるようにする。 ○ゆっくりはっきりと、繰り返し話されれば、自分に関することや身近で具体的な事物を表わすごく簡単な単語や文を聞き取ることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ごく身近にあるアルファベットの文字を識別し、発音することができるようにする。 ○音声で十分に慣れ親しんだ、ごく身近で具体的な事物を表わす単語を見て、その意味を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶やごく短い簡単な指示に応答することができるようにする。 ○相手のサポート（ゆっくり話す、繰り返す、言い換える、自分が言いたいことを表現するのに助け船をだしてくれる など）があれば、自分に関することについてごく簡単な質問に答えることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○定型表現を用いて、簡単な挨拶をすることができるようにする。 ○自分や身の回りの物事に関するごく限られたことについて、簡単な単語や文を用いて話すことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○目的を持ってアルファベットの大字と小文字を活字で書くことができるようにする。 ○例文を参考にしながら、音声などで十分慣れ親しんだ単語や文を書き写すことができるようにする。 	

※CEFRとは、シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会（Council of Europe）が発表。

センター試験における古典の扱いの経緯について

1. センター試験における経緯

S 6 3. 2 「大学入試改革について（報告）」（昭和 63 年 2 月 15 日大学入試改革協議会）において、「特定教科・科目の特定分野のみの結果を利用することが考えられる。」旨の提言があった。

H 2. 1 大学入試センター試験開始

H 3. 1 「近代以降（評論、小説）」、「古文」、「漢文」の 3 分野を別々に成績提供することも可能とした。（現在まで同じ）

2. 学習指導要領における取扱い

～H 1 7 古典は必履修

H 1 8～H 2 7 「国語総合」（古典必履修）と「国語表現 I」（古典は学習内容に含まれない）の 2 科目のうち 1 科目を選択して必履修とすることが可能（国語総合は、全日制普通科高校（2,466 校）の 90%以上が高校 1 年時に開設）

H 2 8～ 古典は必履修

国語請求大学・学部・提供者の大問別請求パターン内訳

大学の50%以上が大学入試にセンター試験の古典を活用しておらず、**約35%の受験者が成績提供の対象となっていない**。
 平成28年度試験における国語成績提供の大問別請求パターンにおいて、「近代以降のみ」を請求する大学数及び学部数は国公私立とも対24年度比それ程変わらない中で、提供者数については全体として対24年度比11.9%増である中、この増加の影響の大部分は私立大学である。(13.4%増)

平成24年度試験

国語大問別請求	大学数						学部数						提供者数					
	国立	公立・公立短期	私立	私立短期	計	割合	国立	公立・公立短期	私立	私立短期	計	割合	国立	公立・公立短期	私立	私立短期	計	割合
近代以降のみを請求 (a)	6	24	350	107	487	50.8%	9	38	893	246	1,186	47.2%	5,536	7,861	394,966	5,903	414,266	31.9%
全パターン ※1	82	77	224	43	426	44.5%	379	177	580	89	1,225	48.7%	370,155	121,147	319,571	1,824	812,697	62.7%
その他の請求パターン ※2	0	3	39	3	45	4.7%	0	5	92	7	104	4.1%	0	525	69,344	251	70,120	5.4%
計	88	104	613	153	958		388	220	1,565	342	2,515		375,691	129,533	783,881	7,978	1,297,083	



平成28年度試験

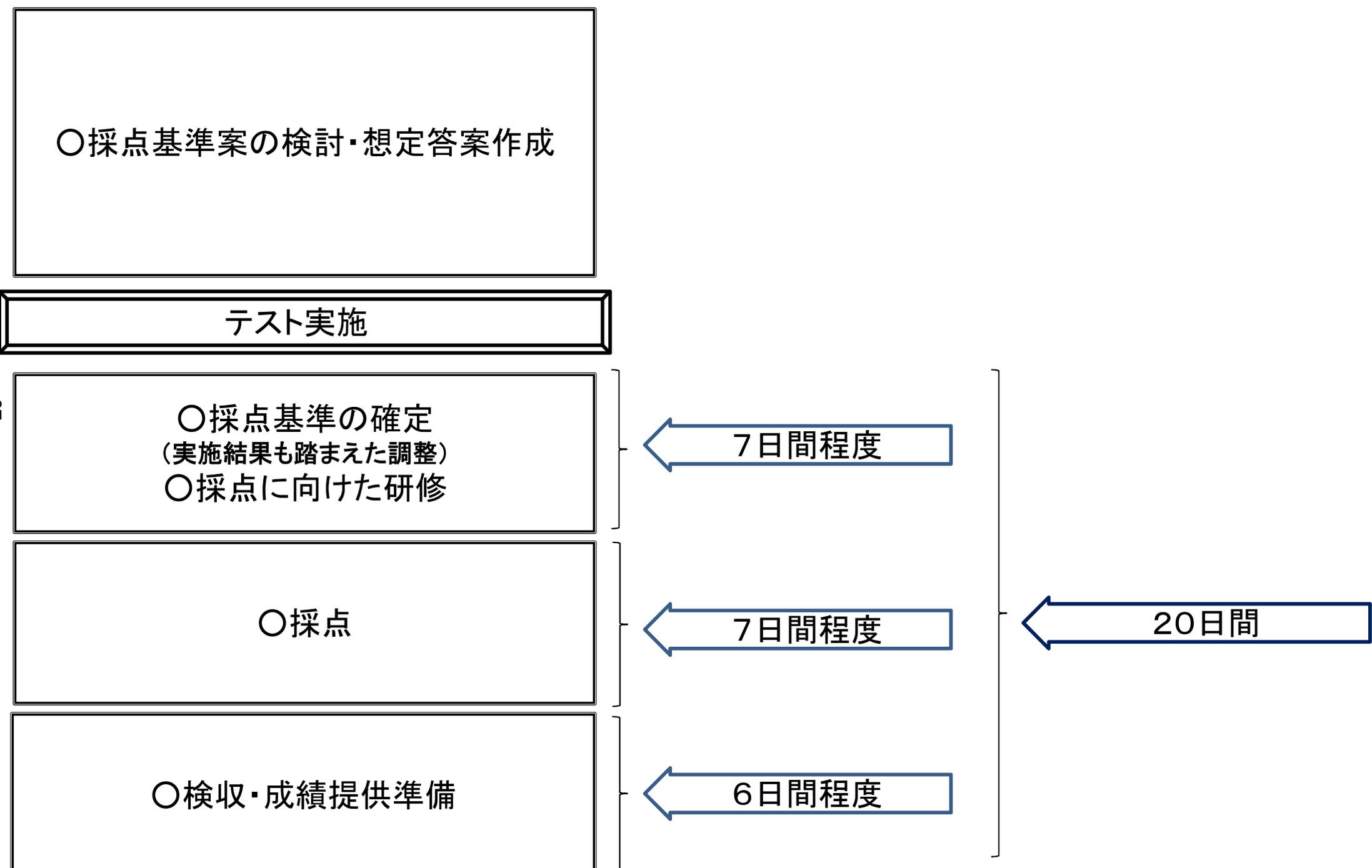
国語大問別請求	大学数						学部数						提供者数					
	国立	公立・公立短期	私立	私立短期	計	割合	国立	公立・公立短期	私立	私立短期	計	割合	国立	公立・公立短期	私立	私立短期	計	割合
近代以降のみを請求 (b)	6	23	369	100	498	51.3%	7	35	991	209	1,242	47.4%	3,413	7,811	447,934	4,547	463,705	34.8%
全パターン ※1	84	82	217	43	426	43.9%	424	182	581	87	1,274	48.6%	346,720	128,576	315,526	1,817	792,639	59.5%
その他の請求パターン ※2	0	3	41	2	46	4.7%	0	5	96	2	103	3.9%	0	642	75,167	191	76,000	5.7%
計	90	108	627	145	970		431	222	1,668	298	2,619		350,133	137,029	838,627	6,555	1,332,344	
(a)→(b)の増減率													△38.3%		13.4%		11.9%	

※1) 大問別得点を全て請求又は大問別得点請求無

※2) 近代以降及び古文、近代以降及び漢文、古文及び漢文のいずれかのパターンで請求

平成25～27年度試験については調査中。

*P9 5、9 6 (大学入試センター試験における大学への成績提供データ)は、大学入試センター試験の機微情報のため非開示



※上記日数については、イメージであり今後、プレテスト等の結果も踏まえ見極めていく

大学入試センター試験実施期日

試験年度	日・曜																															注	志願者数 試験場数
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31		
2	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	7	430,542 336
3	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	6	455,855 351	
4	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	5	472,098 375		
5	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	5	512,712 404			
6	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	4	531,177 441				
7	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	8	557,400 474					
8	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	7	574,115 496						
9	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	6	599,962 533							
10	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	5	597,271 562								
11	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	5	580,064 595									
12	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	4	581,958 623										
13	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	6	590,892 648											
14	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	6	602,090 684												
15	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	5	602,887 693													
16	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	5	587,350 712														
17	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	4	569,950 712															
18	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	7	551,382 721																
19	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	6	553,352 735																	
20	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	6	543,385 736																		
21	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	5	543,981 738																			
22	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	5	553,368 725																				
23	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	706 558,984																
24	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	709 555,537																	
25	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	707 573,344																		
26	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	693 560,672																			
27	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	690 559,132																				
28	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	693 563,768																					

【凡例】

青網はセンター試験の実施期日、黄網は休日、赤枠は第2土曜及び翌日の日曜を表す。

【備考】

平成9年度試験から、高等学校団体の要望を受け1月第3土曜で実施

平成21年度試験から、国立大学協会の要望を受け1月の13日以降の最初の土曜日及び翌日の日曜日に固定

平成12年度から成人の日は1月の第2月曜日に固定

注) 年末年始休から第2土曜日までの平日の期間を表す。

大学入試センター試験実施期日

試験 年度	日・曜																															注	志願者数	
																																	試験場数	
29	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水		
30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			
	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水			
31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			
	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木			
32	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			
	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金			
33	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			
	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日			
34	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			
	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月			
35	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火			
36	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			
	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水			
37	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			
	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金			